

茨城県教育財団文化財調査報告第158集

竜ヶ崎ニュータウン内
埋蔵文化財調査報告書21

長峰古墳群
屋代B遺跡Ⅳ

平成12年3月

都市基盤整備公団茨城地域支社
財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第158集

竜ヶ崎ニュータウン内 埋蔵文化財調査報告書21

長^{なが}峰^{みね}古墳群
屋^や代^{しろ}B遺跡Ⅳ

平成 12 年 3 月

都市基盤整備公団茨城地域支社
財団法人 茨城県教育財団

序

龍ヶ崎市北部の北竜台・龍ヶ岡地域では、竜ヶ崎ニュータウンの建設が、都市基盤整備公団により進められております。ニュータウンの建設は、首都圏の急速な開発に伴って高まりをみせる、住宅需要に応えようとするものでありますが、その予定地内に長峰古墳群及び屋代B遺跡が所在しております。

財団法人茨城県教育財団は、住宅・都市整備公団と委託契約を結び、平成8年4月から6月までの3か月間に長峰古墳群、平成9年7月の1か月間に屋代B遺跡の発掘調査を実施してまいりました。

本書は、長峰古墳群及び屋代B遺跡の調査成果を取録したものです。本書が、研究の資料としてはもとより、郷土史の理解を深めると共に、教育、文化の向上の一助として広く活用されることを希望いたします。

なお、発掘調査及び整理を進めるにあたり、委託者である都市基盤整備公団茨城地域支社から賜りました多大なる御協力に対し、心から感謝申し上げます。

また、茨城県教育委員会、龍ヶ崎市教育委員会をはじめ、関係各機関及び関係各位から御指導、御協力を賜りましたことに、衷心より感謝の意を表します。

平成12年3月

財団法人 茨城県教育財団

理事長 齋藤 佳郎

例 言

- 1 本書は、住宅・都市整備公団の委託により財団法人茨城県教育財団が平成8年度に発掘調査を実施した、龍ヶ崎市長峰町642番地ほかに所在する長峰古墳群、平成9年度に発掘調査を実施した、龍ヶ崎市八代町二ツ堂2460番地に所在する厩代B遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 当遺跡の発掘調査期間及び整理期間は、以下の通りである。
調 査 平成8年4月1日～平成8年6月30日 長峰古墳群
平成9年7月1日～平成9年7月31日 厩代B遺跡
整 理 平成11年8月1日～平成11年10月31日
- 3 長峰古墳群の発掘調査は、平成8年4月1日から平成8年6月30日まで調査第1課長沼田文夫の指揮のもと、調査第1班長萩野谷悟、主任調査員仙波亨、主任調査員川又清明が担当し、厩代B遺跡の発掘調査は平成9年7月1日から平成9年7月31日まで調査第1課長沼田文夫の指揮のもと調査第1班長横堀孝徳、首席調査員吉澤義一、主任調査員菱沼良幸が担当した。
- 4 当遺跡の整理及び執筆・編集は、整理課長川井正一の指揮のもと、主任調査員菱沼良幸が平成11年8月1日から平成11年10月31日まで担当した。
- 5 発掘調査及び整理に際し、御指導、御協力を賜った関係機関並びに関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

凡 例

- 1 調査区設定は、日本平面直角座標第Ⅴ系を原点とし、長峰古墳群はX軸（南北）-9,040m、Y軸（東西）+35,920m、厩代B遺跡はX軸（南北）-8,720m、Y軸（東西）+33,880mの交点を基準点とした。なお、前回までの厩代B遺跡の基準点は（南北）-8,740m、（東西）+33,900mであったが、今回の基準点は、（南北）南に20m、（東西）西に20m移して設定し直した。

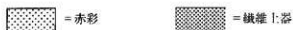
大調査区は、この基準点を基に遺跡範囲内を40m方眼で区画設定した。さらに、この大調査区を東西、南北に各々10等分し、4m方眼の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA、B、C…、西から東へ1、2、3…とし、その組み合わせで「A1区」、「B1区」のように呼称した。小調査区も同様に、北から南へa、b、c…j、西から東へ1、2、3…0とし、名称は大調査区の名称を冠し、「A1a1区」、「B2b1区」のように呼称した。

- 2 遺構、遺物、土層に使用した記号は、以下のとおりである。

遺構	古墳-TM	堀-SD	土坑-SK		
遺物	土器-P	石製品-Q	土製品-DP	金属製品-M	拓本土器-TP
土層	擾乱-K				

- 3 遺構、遺物の実測図中の表示は、以下のとおりである。



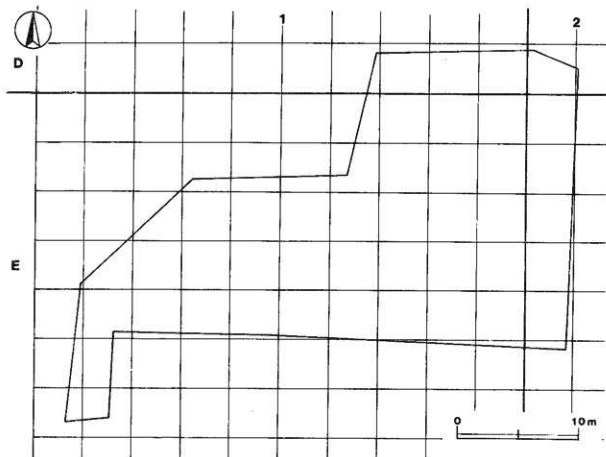
○土製品

- 4 長峰古墳群の遺構番号は長峰遺跡からの続きとし、古墳は第37号から、塚は第3号から、堀は第37号から、土坑は第186号から付した。厩代B遺跡の遺構番号は、前回の調査において確認された第3・4号土器はこれを使用し、堀は第23号から、土坑は第1292号から付した。

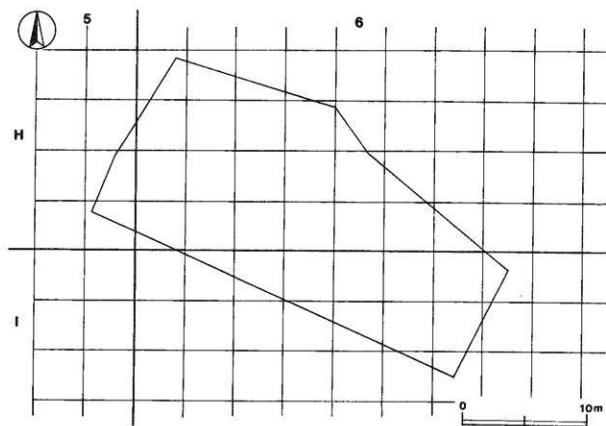
- 5 土層観察と遺物における色調の判定は、「新版標準土色帖」（小山正忠・竹原秀雄編著日本色研事業株式会社）を使用した。

- 6 遺構、遺物実測図の作成方法及び掲載方法については、以下のとおりである。

- 遺跡全体図は縮尺500分の1とし、各遺構の実測図は60分の1の縮尺で掲載することを基本とした。
- 遺物は原則として3分の1の縮尺にした。種類や大きさにより異なる場合もあり、それらについては個々にスケールで表示した。
- 「主軸方向」は、長軸方向とし、その主軸が略北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で示した。（例 N-10°-E、N-10°-W）なお、[] を付したものは推定である。
- 土器の計測値は、A-口径 B-器高 C-底径 D-高台径（脚部径）E-高台高（脚部高）とし、単位はcmである。なお、現存値は（ ）を、推定値は[] を付して示した。
- 遺物観察表の備考の欄は、土器の残存率、実測（P）番号、出土位置及びその他必要と思われる事項を記した。



第1図 長峰古墳群調査区設定図



第2図 屋代B遺跡調査区設定図

抄 録

ふりがな	りゅうがさきにゆーたうんないまいぞうぶんかざいちようさほうこくしょ						
書名	竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書						
副書名	長峰古墳群、屋代B遺跡						
巻次	21						
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告						
シリーズ番号	第158集						
著者名	妻沼 良幸						
編集機関	財団法人 茨城県教育財団						
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL029-225-6587						
発行機関	財団法人 茨城県教育財団						
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL029-225-6587						
発行年月日	2000(平成12)年3月21日						
所収遺跡	所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
ながみねくみんぐん 長峰古墳群	いばらきけんりゅうがさきし 茨城県龍ヶ崎市 ながみねまち 長峰町642番地 ほか	08208 - 35	35度 55分 2秒	140度 14分 2秒	19970401 ~ 19970630	715㎡	龍ヶ岡特定 十地区画整 理事業に伴 う事前調査
やしるBいせき 屋代B遺跡	いばらきけんりゅうがさきし 茨城県龍ヶ崎市 やしるまち 八代町二ツ堂 2460番地	08208 - 15	35度 55分 4秒	140度 14分 46秒	19980701 ~ 19980731	397㎡	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項
長峰古墳群	古墳	古墳時代	古墳周溝	1基	土師器(壺), 円筒埴輪, 朝顔形円筒埴輪	古墳の周溝及び 中世の城郭跡。	
	城館跡	中世	塚	1基	土師質土器(皿, 内耳鍋)		
	その他		堀	2条	陶器(壺, 甕), 石製品		
屋代B遺跡	城館跡	中世	土壇	2基	土師質土器(皿, 罎, 甕), 土師 質土器(杯, 壺, 甕), 土師 質土器(皿, 甕), 石製品	中世の城郭跡。	
	その他		土坑	1基			
	その他		ピット群	1か所	陶器(罎, 甕), 石製品, 鉄 製品, 古銭		

目 次

序	
例 言	
凡 例	
抄 録	
第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査経過	1
第2章 位置と環境	2
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	2
第3章 長峰古墳群	7
第1節 遺跡の概要	7
第2節 遺構と遺物	7
1 古墳	7
2 塚	12
3 堀	16
4 土坑	21
5 遺構外出土遺物	23
第3節 まとめ	27
第4章 埴代B遺跡	29
第1節 遺跡の概要	29
第2節 遺構と遺物	29
1 土塚	29
2 堀	38
3 土坑	39
4 ビット群	39
5 遺構外出土遺物	41
第3節 まとめ	43
写真図版	

挿 図 目 次

長峰古墳群	第15図 第186号土坑実測図	22
第1図 長峰古墳群調査区設定図	第16図 第187号土坑実測図	22
第2図 厩代B遺跡調査区設定図	第17図 遺構外出土遺物実測図(1)	23
第3図 長峰古墳群、厩代B遺跡周辺遺跡 分布図	第18図 遺構外出土遺物実測図(2)	24
第4図 第37号墳実測図	第19図 遺構外出土遺物実測図(3)	25
第5図 第37号墳出土遺物実測図(1)	厩代B遺跡	
第6図 調査区域全体図	第20図 調査区域全体図	31・32
第7図 第37号墳出土遺物実測図(2)	第21図 第1・2号トレンチ実測図(1)	34
第8図 第3号塚実測図	第22図 第3～5号トレンチ実測図(2)	35
第9図 第3号塚出土遺物実測図	第23図 第3・4号上層出土遺物実測図(1)	37
第10図 第37号塚実測図(1)	第24図 第3・4号上層出土遺物実測図(2)	38
第11図 第37号塚実測図(2)	第25図 第1292号上坑実測図	39
第12図 第37号塚出土遺物実測図	第26図 第24号塚実測図	40
第13図 第42号塚実測図	第27図 遺構外出土遺物実測図	42
第14図 第42号塚出土遺物実測図	第28図 厩代城館跡全体図	44

表 目 次

表1 長峰古墳群、厩代B遺跡周辺遺跡一覧表	4
-----------------------	---

写真図版目次

長峰古墳群	厩代B遺跡
P L 1 調査区遠景、調査区全景	P L 8 調査前全景、調査終了時全景
P L 2 第3号塚調査前風景、第3号塚土層断面 (B-B'), 第3号塚土層断面(A-A')	P L 9 第4号トレンチ北部土層断面(D-D'), 第3号トレンチ南部土層断面(C-C'), 第24号塚完掘状況
P L 3 第37号墳遺物出土状況、第37号塚完掘状況、 第187号土坑完掘状況	P L 10 第3・4号上層・遺構外出土遺物
P L 4 第37号墳・第3号塚・第37号塚・遺構外出 土遺物	
P L 5 遺構外出土遺物	
P L 6 第37号墳・遺構外出土遺物	
P L 7 第37号墳・第3号塚・第37号塚・遺構外出 土遺物	

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経過

住宅・都市整備公団は、自然の保全に留意した調いのある生活環境のもと、既成の龍ヶ崎市街地と結合した調和のある新しい町づくりを目指し、昭和45年「竜ヶ崎・牛久都市区画事業及び龍ヶ岡特定土地区画整理事業」が計画され、龍ヶ崎市北部台地上に竜ヶ崎ニュータウンの建設を着手した。

茨城県教育委員会は、昭和45年に実施した埋蔵文化財の分布調査の結果に基づき、開発地域内に所在する遺跡について、文化財保護の立場から龍ヶ崎市教育委員会と協議を重ね、昭和51年に現状保存が困難な31遺跡について、記録保存の措置を講ずる事となった。調査は、昭和52年から平成元年まで実施された。

平成8年2月29日、住宅・都市整備公団から茨城県教育委員会あてに、竜ヶ崎ニュータウン龍ヶ岡地区事業地内における長峰古墳群の取り扱いについて協議書が提出され、文化財保護の立場から協議が行われた。その結果、現状保存が困難であることから、平成8年3月13日、茨城県教育委員会から住宅・都市整備公団あてに長峰古墳群(715㎡)を記録保存とする旨回答し、調査機関として、財団法人茨城県教育財団が紹介された。

平成9年3月27日、龍ヶ岡特定土地区画整理事業地内における原代B遺跡の取り扱いについて協議が行われた。平成9年3月27日、原代B遺跡(397㎡)を記録保存とする旨回答し、調査機関として財団法人茨城県教育財団が紹介された。

なお、住宅・都市整備公団は、平成11年10月1日より都市基盤整備公団に名称を変更した。

第2節 調査経過

長峰古墳群の発掘調査は、平成8年4月1日から平成8年6月30日までの3か月間、原代B遺跡の調査は平成9年7月の1か月間で実施した。以下、調査経過についてその概要を記述する。

(長峰古墳群)平成8年

- 4月上旬 12日までに発掘調査のための事務所、倉庫等を設置した。
- 中旬 15日から調査補助員を投入し、発掘器材等の整備や調査区内の除草・清掃等を開始した。
- 下旬 23日から墳丘・地形測量を実施した。
- 5月上旬 1日から人力で表土除去を開始し、上坑2基、堀1条、古墳周溝1基を確認した。
- 中旬 10日から遺構調査を実施した。また、調査区北側にトレンチを設定し堀1条を確認した。
- 下旬 墳丘部の南北にベルトを設定し掘り込みを開始した。また、古墳の周溝から埴輪片が出土した。
- 6月上旬 遺構の掘り込み及び調査を継続し、墳丘部の南北ベルトの土層断面実測を行った。
- 中旬 墳丘部の南北ベルトを除去した後、墳丘部の東西の土層断面実測を行った。
- 下旬 20日に航空写真撮影を行った。その後、安全対策等を行い、28日までにすべての調査を終了した。

(原代B遺跡)平成9年

- 7月上旬 1日、現場事務所設置、リース物品搬入を行い調査の準備をした。2日から調査補助員を投入し、遺跡内の清掃を行った。3日からトレンチ3か所を設定し、掘り込みを行い、堀2条を確認した。
- 中旬 トレンチの土層断面実測を行い、さらに、トレンチ2か所の掘り込みを開始した。
- 下旬 確認された遺構の実測を行い、24日には遺構全景写真撮影を行った。その後、補足調査及び安全対策を行い、30日までにすべての調査を終了した。

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

長峰古墳群は龍ヶ崎市長峰町642番地ほかに、厩代B遺跡は龍ヶ崎市八代町二ツ堂後2460番地に所在する。

龍ヶ崎市は茨城県東部の南部に位置しており、東は稲敷郡江戸崎町、南は同郡河内町・北相馬郡利根町、西は取手市・北相馬郡鹿代町、北は牛久市・稲敷郡葛崎町の2市5町と接している。

長峰古墳群及び厩代B遺跡周辺の地形は、筑波・稲敷台地とその南側に広がる小貝川低地に分けられる。筑波・稲敷台地は標高20～27mの平地であるが、縁辺部は浸食谷により複雑な地形を形成している。筑波・稲敷台地は、海成の成田層上に形成され、上位に龍ヶ崎砂礫層、常総粘土層が重なり、関東ローム層（武蔵野ローム層、立川ローム層）が2～3mの厚さで堆積している。南部の小貝川低地は、筑波・稲敷台地と北相馬台地との間に挟まれ、古鬼怒川と小貝川によって形成された沖積低地で、標高3～6mである。両者の境界は比高15～20mの急斜面となっている。

長峰古墳群は、龍ヶ崎市街地から北東に約4kmの稲敷台地南縁に位置し、竜ヶ崎ニュータウンの東端にあたり、標高は23～26mである。当古墳群の北側に長峰城跡が所在し、さらにその北側には長峰町と半田町の間に開いた浸食谷が台地間を北西の貝原塚町方面に延びており崖を形成している。南側にも谷津が長峰町から八代町の間に開口している。当古墳群は、その舌状に張り出した長峰町の台地先端に所在し、南側は造成工事に伴い斜面部となっている。

厩代B遺跡は、龍ヶ崎市街地から北東に約2kmの稲敷台地上に位置している。台地の標高は23～24mでほぼ平坦である。遺跡の北側には八代町から別所町にかけて幅150～200mの細長い浸食谷が入り込み、南側は小貝川低地が広がっている。台地と低地の比高は北側で約17m、南側で約19mで、急崖となっている。当遺跡の所在する台地は、南北を低地に挟まれ幅は300～350mと狭く、東西に延びている。さらに、東側は造成工事に伴い斜面部となっている。

第2節 歴史的環境

龍ヶ浦と利根川に挟まれた稲敷台地は、水陸交通の要衝にあり、自然の地の利を得て古くから人々の生活が営まれてきた。この地域は、県内でも有数の遺跡分布地として知られ、明治16年に調査が行われた陸平貝塚（美浦村）を筆頭に、愛宕山古墳（龍ヶ崎市）〈5〉、所作貝塚（桜川村）の調査が行われるなど、著名な遺跡が数多く所在し早くから考古学界の注目を集めてきた地域である。

長峰古墳群〈1〉、厩代B遺跡〈2〉からは、古墳時代、中世の遺構が検出されている。ここでは両遺跡と同時代の遺跡を中心に概要を述べることにする。

古墳時代の遺跡の分布を見ると、稲敷台地南端部に連なるように集中している。前期の遺跡では、廻り地A遺跡から4基の方形周溝墓が検出されている⁽⁴⁾。前期から中期の遺跡としては、桜山古墳〈13〉と松葉遺跡がある。桜山古墳は稲敷台地南端の独立丘上に位置し、全長71.2m、高さ8.9mの前方後円墳であり、太刀・剣・短剣・鉄鏃・刀子等が出上している⁽⁵⁾。また、松葉遺跡からは動物形土製品が出土している⁽⁶⁾。中期から後期にかけては、愛宕山古墳、長峰遺跡〈12〉がある。愛宕山古墳からは、高さ約50cmの男子埴輪と高さ約46cmの女子埴

輪が出土している⁴⁷。長峰遺跡では、前方後円墳4基、方墳2基、円墳29基が確認されているが、耕作等により削平されており実数は明らかではない⁴⁸。他に、墳丘を伴う古墳は、奈良岡古墳〈3〉、稲薮古墳、堂の上古墳、稲薮古墳、久保山古墳、大塚古墳がある。古墳時代の集落は主に、小野川流域の東台地縁辺部と小貝川低地を隔む台地縁辺部に集中して営まれていたことがうかがえる。古墳時代の集落跡には、弥生時代から継続して営まれた遺跡と、古墳時代に新たに形成された遺跡に分けられる。前者の遺跡として、厩代A遺跡〈8〉から住居跡64軒（弥生時代28軒、古墳時代26軒、奈良・平安時代9軒、時期不明1軒）が⁴⁹、外八代遺跡〈9〉から85軒の住居跡（弥生時代4軒、古墳時代39軒、奈良平安時代11軒、時期不明31軒）が⁵⁰、南三馬遺跡〈7〉から545軒の住居跡（縄文時代395軒、弥生時代6軒、古墳時代81軒、奈良・平安時代63軒）が⁵¹、長峰遺跡から住居跡（弥生時代51軒、古墳時代68、軒時期不明5軒）が検出されている⁵²。後者の遺跡として、早谷遺跡から古墳時代の住居跡47軒が検出されており、まとまった集落を形成していた⁵³。また、数軒から十数軒を単位とする小集落が営まれていた遺跡として、大羽谷津遺跡（住居跡5軒）⁵⁴、松葉遺跡（住居跡11軒）⁵⁵、沖餅遺跡（住居跡13軒）⁵⁶、成沢遺跡（住居跡13軒）⁵⁷、十三塚遺跡〈10〉（住居跡3軒）⁵⁸、地理台遺跡〈11〉（住居跡15軒）⁵⁹がある。

中世の遺跡は、主に城館跡であり、それらのほとんどは稲敷台地南側の縁辺部に所在しているが、台地上に所在する遺跡は谷津に面した突端部にある。いずれも戦略上有利な地形を選んで構築されている。南北朝時代、南朝方の小田氏、北畠親房に対し、北朝方の高師冬が常陸に進み、頼島城〈4〉において戦闘が行われたとの記述が「館岡社務所記録」と「北畠親房事書」に記されている⁶⁰。南北朝の終わり頃、信太荘は小田孝朝の支配となったが、上杉憲方・朝宗に攻められ所領を失った。小田氏の勢力後退に伴い、上杉方の代官として土岐原氏が信太荘の惣政所の役職に着き、信太荘（江戸崎）に移り住んだ。その後も小田氏と土岐原氏の対峙は続いたが、大永3年（1523）、土岐原氏は小田氏側の八代城に攻撃を仕掛け勝利したことが「足利頼朝書状」に記されている⁶¹。この八代城は、稲敷台地南端部の標高25mに造られた外八代城⁶²（外八代遺跡）と、厩代城⁶³（厩代A・B遺跡）が一体として使われたと考えられている。この以後、土岐原氏は龍ヶ崎地域における支配を強め、外八代城、厩代城の他にも、龍ヶ崎城〈6〉、調馬城、貝原塚城、長峰城〈14〉、登城山城〈15〉、雲吉城〈16〉、大日山城等を支配下に置いたと考えられる。天正18年（1590）、佐竹義宣の弟芦名盛重は土岐原氏を滅ぼし、龍ヶ崎城を支城としたことが「佐竹義重書状」に記されている⁶⁴。その後、富田将監から大久保岩見守の領地となり、慶長11年（1606）伊達政宗が龍ヶ崎の地を与えられ、伊達氏が幕末まで支配した。

※文中の〈 〉内の番号は、表1、第3図中の該当番号と同じである。

註

- 1) 茨城県教育財団「竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書7」『茨城県教育財団埋蔵文化財調査報告』XV 1982年3月
- 2) 茨城県教育財団「竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書20」『茨城県教育財団埋蔵文化財調査報告』第61集 1990年6月
- 3) 茨城県教育財団「竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書1」『茨城県教育財団埋蔵文化財調査報告』I 1979年3月
- 4) 大野延太郎「常陸国龍ヶ崎発見の埴輪土偶について」『東京人類学雑誌』20 1905年4月
- 5) 茨城県教育財団「竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書19」『茨城県教育財団埋蔵文化財調査報告』第58集 1990年3月

- (6) 茨城県教育財団「竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書6」『茨城県教育財団埋蔵文化財調査報告』XIV
1982年3月
- (7) 茨城県教育財団「竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書2」『茨城県教育財団埋蔵文化財調査報告』II
1980年3月
- (8) 茨城県教育財団「竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書10」『茨城県教育財団埋蔵文化財調査報告』第27集
1984年8月
茨城県教育財団「竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書11」『茨城県教育財団埋蔵文化財調査報告』第30集
1985年10月
茨城県教育財団「竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書12」『茨城県教育財団埋蔵文化財調査報告』第32集
1986年3月
茨城県教育財団「竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書16」『茨城県教育財団埋蔵文化財調査報告』第44集
1987年12月
茨城県教育財団「竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書18」『茨城県教育財団埋蔵文化財調査報告』第49集
1989年3月
- (9) (5)と同じ
- (10) 茨城県教育財団「竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書8」『茨城県教育財団埋蔵文化財調査報告』第19集
1983年3月
- (11) 茨城県教育財団「竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書5」『茨城県教育財団埋蔵文化財調査報告』Ⅲ
1981年3月
- (12) (3)と同じ
- (13) 茨城県教育財団「竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書3」『茨城県教育財団埋蔵文化財調査報告』Ⅲ
1980年3月
- (14) (6)と同じ

表1 長峰古墳群、厩代B遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	県遺跡 番号	時代					番号	遺跡名	県遺跡 番号	時代							
			旧	縄	弥	古	奈				中	世	旧	縄	弥	古	奈	中
①	長峰古墳群	1589				○		○	9	外八代遺跡	3351				○	○	○	○
②	厩代B遺跡	1569		○	○	○	○	○	10	十三塚遺跡	3350					○		○
3	奈戸岡古墳群	1561				○			11	尾坪台遺跡	3954				○	○		
4	駒馬城跡	1562						○	12	長峰遺跡					○	○	○	○
5	愛宕山古墳	1555				○			13	桜山古墳					○			
6	龍ヶ崎城跡	1556						○	14	長峰城跡	1590							○
7	南三島遺跡	3353		○	○	○	○		15	登城山城跡	1593							○
8	厩代A遺跡	1569			○	○	○	○	16	要害城跡	1594							○



第3図 長峰古墳群、歴代B遺跡周辺遺跡分布図

- 003 茨城県教育財団「竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書14」『茨城県教育財団埋蔵文化財調査報告』第39集
1986年11月
- 004 03と同一
- 005 龍ヶ崎市史編さん委員会『龍ヶ崎市史 中世資料編』1993年3月
- 006 07と同一
- 007 (7)と同一
- 008 (6)と同一
- 茨城県教育財団「竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書13」『茨城県教育財団埋蔵文化財調査報告』第33集
1986年3月
- 茨城県教育財団「竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書15」『茨城県教育財団埋蔵文化財調査報告』第40集
1987年3月
- 茨城県教育財団「竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書17」『茨城県教育財団埋蔵文化財調査報告』第44集
1988年3月
- 009 (7)と同一

参考文献

- ・茨城県農地部農地計画課「土地分類基本調査 龍ヶ崎」1987年12月
- ・蜂須紀夫『茨城県 地学のガイド』コロナ社 1986年11月
- ・茨城県教育委員会『茨城県遺跡地図』1990年3月
- ・茨城県史編集会『茨城県史料 考古資料編 古墳時代』1974年2月
- ・茨城県史編集会『茨城県史料 中世編』1986年3月
- ・龍ヶ崎市史編さん委員会『龍ヶ崎市史 原始古代編』1999年3月
- ・龍ヶ崎市史編さん委員会『龍ヶ崎市史 中世編』1998年3月
- ・龍ヶ崎市史編さん委員会『龍ヶ崎市史 中世資料編』1993年3月
- ・龍ヶ崎市史編さん委員会『龍ヶ崎市史 中世資料編 別冊』1994年3月

第3章 長峰古墳群

第1節 遺跡の概要

長峰古墳群は、龍ヶ崎市の北東部、標高23~26mの稲敷台地上の南端部に位置する。当古墳群は、古墳時代及び中世の複合遺跡である。現況は山林で、調査面積は715m²である。調査区の西側は前回は調査が行われた長峰遺跡及び板山古墳があり、東側には長峰城跡が接している。南側は台地から低地にかけての斜面部であったが、造成工事に伴い現況はとどめていない。

今回の発掘調査によって、古墳周溝1基、塚1基、堀2条及び土坑2基を検出した。

遺物は、遺物収納コンテナ(60×40×20cm)に5箱出土した。縄文時代の遺物は、早期から後期までの縄文土器片である。弥生時代の遺物は、弥生土器片である。古墳時代の遺物は、円筒埴輪、土師器(杯、椀、器台、埴、甕、甕)及び須恵器(甕)である。中世の遺物としては、土師質土器(皿、插鉢、内耳鍋)がある。

第2節 遺構と遺物

1 古墳

今回の調査で、古墳の周溝の一部を検出したが、周溝が調査区域外に延びているため形状や規模を正確にとらえることができなかった。また、墳丘部があったと考えられる場所は造成工事により削平されており、墳丘の確認はできなかった。以下、検出された遺構及び出土遺物について記載する。

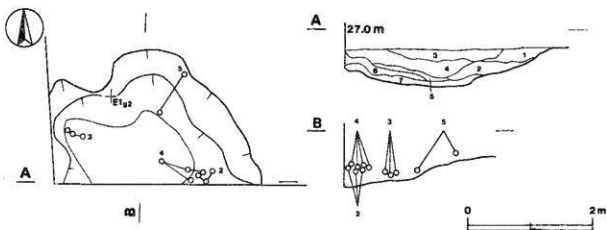
第37号古墳(第4図)

位置 調査区南西部、E1g2区。

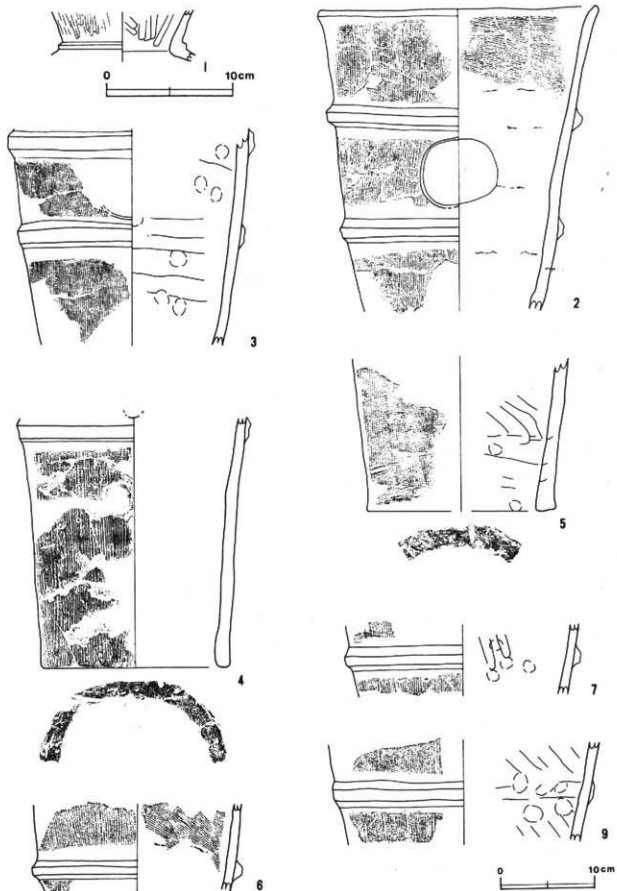
墳形及び規模 検出された遺構の規模は、東西3.65m、深さ55cmである。周溝の一部しか確認されなかったため、墳形及び規模は不明である。

墳丘 削平により残存しない。

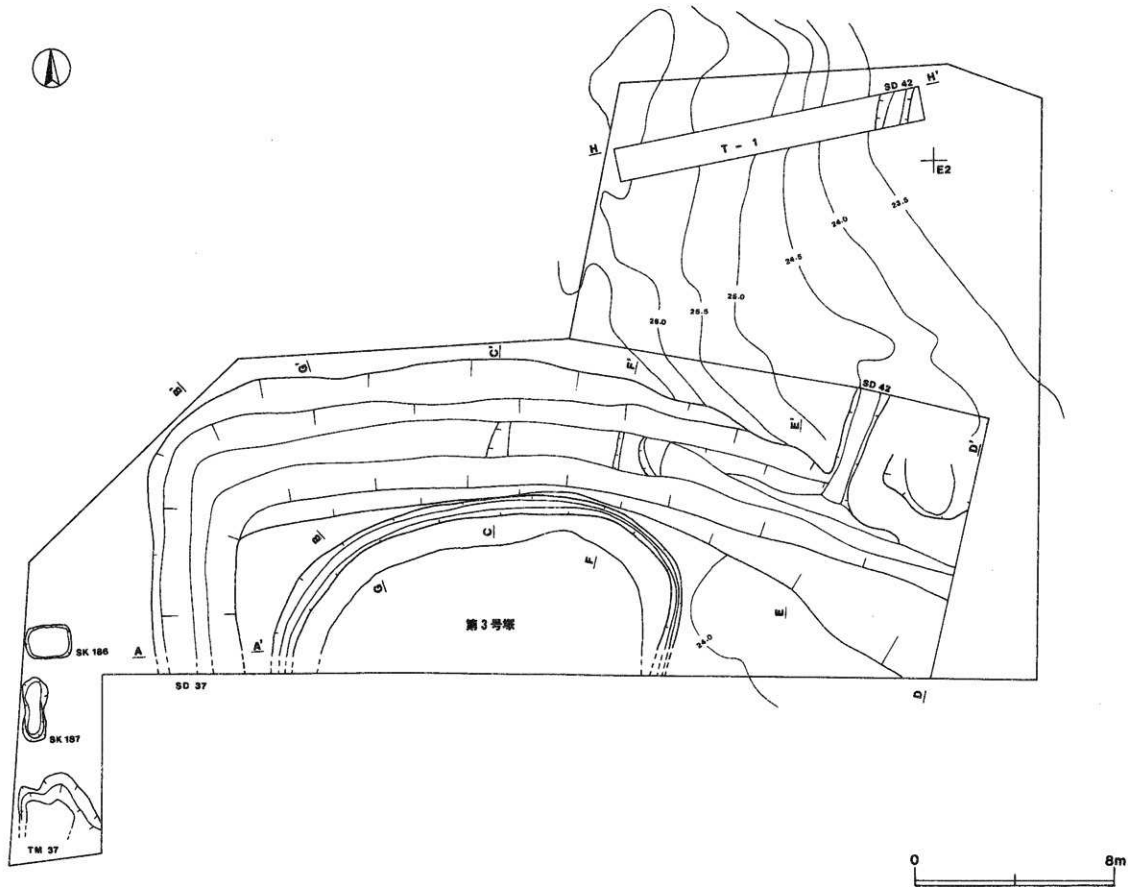
周溝 東西及び南側が調査区域外のため、周溝の一部のみが調査された。覆土はレンズ状に堆積しており、自然堆積と考えられる。



第4図 第37号墳実測図



第5图 第37号出土物实测图(1)



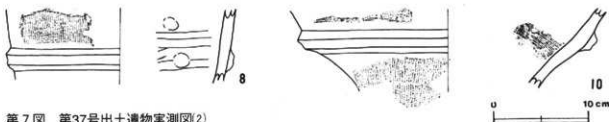
第6图 調査区域全体图

周溝土層解説

1	暗褐色	ローム粒子少量, 焼土粒子・ローム小ブロック極少量	6	褐色	ローム小ブロック・ローム粒子多量
2	褐色	ローム小ブロック・ローム粒子中量, 焼土粒子極少量	7	褐色	ローム粒子多量, ローム小ブロック中量, ローム中ブロック極少量
3	黒褐色	ローム粒子中量, 焼土粒子・ローム小ブロック極少量			
4	褐色	ローム粒子中量, ローム小ブロック少量			
5	暗褐色	ローム粒子多量, ローム小ブロック中量, ローム中ブロック少量			

遺物 土師器片173点, 埴輪片780点が出土している。第5図1の土師器の壺は, 覆土中から出土している。2~5の円筒埴輪は周溝の覆土下層から出土している。6・7・9・第7図8の円筒埴輪, 10の朝顔形円筒埴輪は, 覆土中から出土している。

所見 本跡は, 周溝の北側部分であり, 墳丘は周溝の南側に位置していたと考えられる。遺構の形態及び規模は不明であるが, 周溝内から出土した埴輪から考えると, 本跡の時期は, 6世紀中葉であると思われる。



第7図 第37号出土遺物実測図(2)

第37号古墳出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考			
第5図 1	壺 土師器	B (4.1)	頸部片。作部は内押し、頸部から外傾しながら立ち上がる。	頸部と体部の境に断面三角形の細い陰帯を貼り、体部外面ハケ目調整後ヘラ磨き、内面ヘラナデ。	雲母・長石・砂粒 褐色 普通	P 1 覆土中 P L 4 5%			
図版番号	種	寸法 器高 口径 器厚 基部径	突帯	透孔	成形と内面の状況	ハケ目 本/cm	胎土	焼成 色調	備考
第5図 2	円筒埴輪	(32.2) 29.2	1.3~1.1 2条現存。台形。上から1本目の突帯幅は1.2cm, 2本目は0.8cmの太身タイプである。いずれも突出は低い。	円孔2つ現存。上から1.2本目の突帯間に1対(2孔)。透孔は穿孔後ナデ。	外面タテハケ。内面上端斜位のハケ目。内面縦位の指ナデ。	タテハケ 11 斜位のハケ目 13	長石 石英 褐色 普通	D P 1 30% 覆土下層 P L 6	
3	円筒埴輪	(29.1) -	1.2~1.1 2条現存。台形。幅は1.4cmの太身タイプ。突出は低い。	円孔下端部1つ現存。切りあけは不明。	左回り巻き上げ。外面タテハケ。内面斜位の指ナデ。	タテハケ 11	石英 雲母 砂粒 褐色 普通	D P 2 20% 覆土下層 P L 6	
4	円筒埴輪	(26.3) -	1.5~1.2 1条現存。台形。幅は1.1cmの太身タイプで。突出は低い。	現存部なく不明。	左回り巻き上げ。外面タテハケ。内面斜位の指ナデ。	タテハケ 10	長石 石英 赤色粒子 褐色 普通	D P 3 20% 覆土下層 P L 6	
5	円筒埴輪	(16.1) -	2.1~1.3 現存部なく不明。	現存部なく不明。	左回り巻き上げ。外面タテハケ。内面斜位の指ナデ。	タテハケ 10	長石 石英 赤色粒子 褐色 普通	D P 4 5% 覆土下層 P L 6	
6	円筒埴輪	(9.4) -	1.0~0.8 1条現存。台形。幅は0.9cmの太身タイプである。	現存部なく不明。	外面タテハケ。内面上端斜位のハケ目。下手縦位の指ナデ。	タテハケ 10 斜位のハケ目 7	長石 石英 褐色 普通	D P 5 5% 覆土中 P L 6	
7	円筒埴輪	(7.6) -	1.0~0.8 1条現存。台形。幅は1cmの太身タイプである。	現存部なく不明。	外面タテハケ。内面斜位の指ナデ。上端に斜位のハケ目。	タテハケ 10~11	石英 雲母 砂粒 明褐色 普通	D P 6 5% 覆土中 P L 7	

図版番号	種別	寸法		突起	透孔	成形と内面の状況	ハケ目 本 目	粒上	焼成 色 調	備考
		高 門径(cm)	厚さ(cm)							
第7図 8	円筒地輪	{ 7.9}	1.2~1.0	1尖: 凸形、幅は1cmの本身タイプである	現存部なく不明	外面タテハケ。内面横位の滑ナデ。	タテハケ 11	長石 雲母	褐色 普通	DP7 5% 腹上中 PL7
第5図 9	円筒地輪	{ 10.8}	1.0~0.8	1条現存。凸形、幅は1.2cmの本身タイプである	現存部なく不明	外面タテハケ。内面縦位の滑ナデ。	タテハケ 11	長石 G6R 雲母	灰褐色 普通	DP9 3% 腹上中 PL7
第7図 10	筒形 円筒地輪	{ 8.6}	1.4~1.0	1条現存。凸形、幅は1.3cmの本身タイプである	現存部なく不明	外面タテハケ。内面上下斜位のハケ目、下平滑ナデ。	タテハケ 11	長石 石英 雲母	灰褐色 普通	DP10 3% 腹上中 PL7

2 塚

本跡は南部の半分が調査区域外のため、調査は北部のみ行われた。当初は古墳と考え調査を行ったが、調査の結果、塚であることが判明した。また、塚の外側に沿って溝が検出され、塚に伴うものと考えられる。以下、検出した塚とそこから出土した遺物について記載する。

第3号塚(第8図)

位置 調査区南部、E1e4~E1e8区。

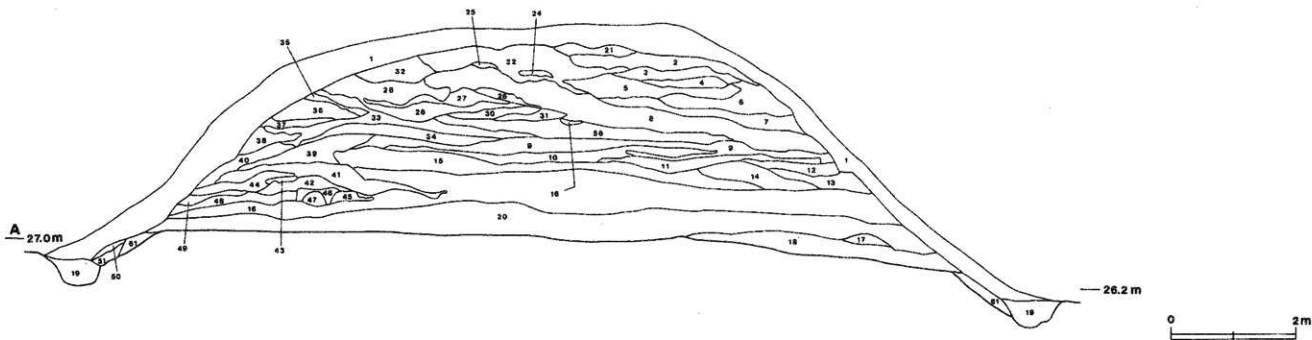
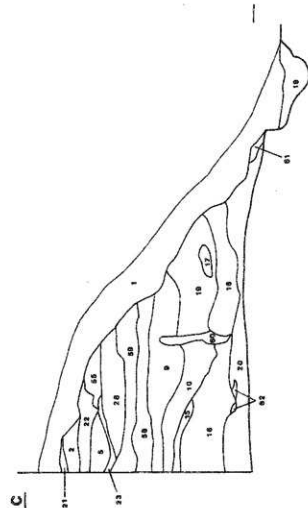
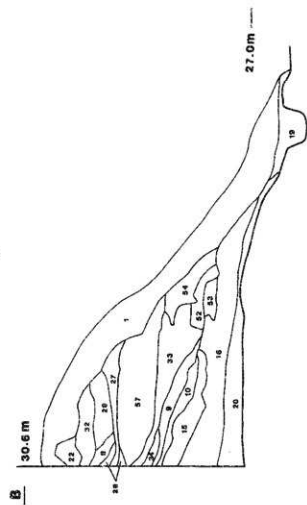
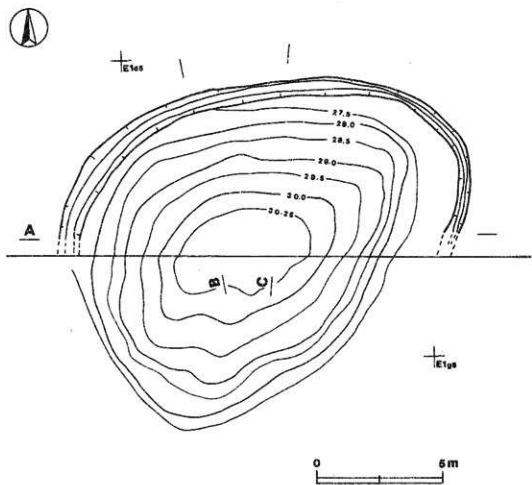
形状及び規模 南北径12.4m、東西径11.6mの楕円形を呈し、高さは4.1mである。また、本跡の周囲からは周溝と思われる溝が検出されているが、前述の通り南部は調査区域外のため、溝が1周するかどうかは不明である。溝の規模は長径16.3mで、上端1.1~0.4m、下端0.4~0.2cm、深さ60~80cmで、断面はU字型である。

長径方向 N-57°-E

構築状況 Ⅱ地表面を基底部に築かれ、62層からなる。19層は溝の覆上で、含有物及び堆積状況から人為堆積と考えられる。

土層解説

1 緑褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子極少量	23 暗褐色	ローム粒中量、ローム小ブロック少量
2 暗褐色	ローム粒子極少量	24 褐色	ローム粒子多量、ローム小ブロック少量
3 暗褐色	ローム粒子少量、ローム中ブロック極少量	25 褐色	ローム粒子中量、ローム小ブロック少量
4 褐色	ローム粒子多量、ローム中・小ブロック少量	26 褐色	ローム粒中量、ローム小ブロック極少量
5 褐色	ローム粒子中量、ローム中・小ブロック少量	27 黒褐色	ローム中ブロック中量、ローム小ブロック・ローム粒子少量、砂質小ブロック
6 褐色	ローム粒中量、ローム中・小ブロック少量、ローム大・中ブロック極少量	28 黒褐色	ローム粒少量、焼上粒子・ローム小ブロック極少量
7 黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量	29 黒褐色	ローム粒中量、ローム中・小ブロック少量、ローム大ブロック極少量
8 暗褐色	ローム粒子多量、ローム中・小ブロック少量、ローム大ブロック極少量	30 暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブロック中量、ローム大ブロック極少量
9 黒褐色	ローム中・小ブロック・ローム粒子極少量	31 褐色	ローム粒多量、ローム中・小ブロック少量
10 褐色	ローム粒子多量、ローム中・小ブロック少量、ローム大ブロック極少量	32 黄褐色	粘土粒子多量、ローム中・小ブロック極少量
11 暗褐色	ローム中・小ブロック・ローム粒子少量	33 褐色	ローム粒中量、ローム中・小ブロック少量
12 黒色	ローム小ブロック・ローム粒子極少量	34 暗褐色	ローム粒子少量、ローム中・小ブロック極少量
13 黒色	ローム粒少量、ローム中・小ブロック極少量	35 褐色	ローム粒子多量、炭化粒子・ローム小ブロック極少量
14 明褐色	ローム粒子多量、ローム中・小ブロック少量、ローム大ブロック極少量	36 褐色	ローム粒多量、ローム中ブロック少量
15 暗褐色	ローム中ブロック少量、ローム小ブロック・ローム粒子極少量	37 褐色	ローム粒中量、ローム小ブロック少量、炭化粒子・ローム中ブロック極少量
16 暗褐色	焼上粒子・炭化粒子・ローム中・小ブロック・ローム粒少量	38 暗褐色	ローム粒中量、ローム小ブロック少量、ローム中ブロック極少量
17 褐色	ローム粒多量	39 暗褐色	ローム粒中量、ローム中・小ブロック少量
18 褐色	ローム粒子多量、ローム中・小ブロック少量	40 褐色	ローム粒中量、ローム中ブロック少量、ローム小ブロック極少量
19 暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子極少量	41 褐色	ローム小ブロック・ローム粒多量、ローム中ブロック中量、ローム大ブロック極少量
20 暗褐色	ローム粒子少量、炭化粒子・ローム小ブロック極少量	42 暗褐色	ローム粒少量、焼上粒・ローム中ブロック極少量
21 黒褐色	ローム粒少量	43 褐色	ローム中・小ブロック・ローム粒中量
22 暗褐色	ローム粒多量、ローム小ブロック少量、ローム中ブロック極少量	44 黒褐色	ローム粒少量、炭化粒子・ローム小ブロック極少量

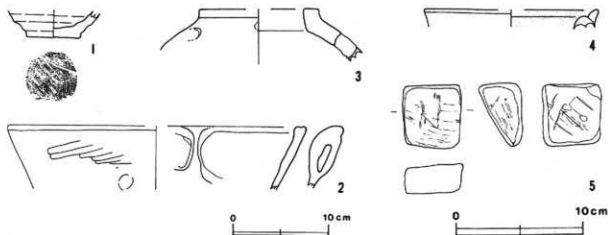


第8图 第3号塚实测图

45	黒褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック極少量	54	暗褐色	炭化粒子・ローム粒子極少量
46	明褐色	ローム粒子中量、ローム小ブロック少量	55	暗褐色	ローム粒子多量、ローム小ブロック少量
47	にぶい赤褐色	ローム粒子少量、焼土粒子極少量	56	褐色	ローム中・小ブロック多量、ローム粒子少量、ローム大ブロック極少量
48	暗褐色	ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子極少量	57	極暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・ローム小ブロック極少量
49	褐色	ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック極少量	58	褐色	ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブロック少量
50	黒褐色	ローム粒子極少量	59	褐色	ローム粒子多量、ローム大・中ブロック少量
51	極暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量、ローム中ブロック極少量	60	褐色	ローム粒子中量
52	黒褐色	焼土粒子・ローム粒子極少量	61	暗褐色	ローム粒子中量
53	暗褐色	ローム中・小ブロック中量、炭化粒子・ローム粒子少量	62	暗赤褐色	焼土粒子中量、焼土小ブロック少量、炭化粒子極少量

遺物 土師質土器片5点、陶器片17点、砥石1点が出土している。第9図1は土師質の小皿、2は内耳鍋である。3は陶器の壺、4は壺である。5は砥石である。いずれも盛土中からの出土である。

所見 本跡に沿って長峰城跡に関連すると思われる堀が検出された。本跡は、占地的にも南側の低地を一望できる位置にあることから、長峰城に伴う槽台（物見塚）として構築され、近世に塚として再利用されたのではないかと考えられる。



第9図 第3号塚出土遺物実測図

第3号塚出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第9図1	小皿 土師質土器	B (2.1)	底部から体部にかけての腹片、平流。	体部内・外面口ロナデ。底部回転	雲母・砂粒 にぶい赤褐色 普通	P 2 覆土中 P L 4
		C 4.2	体部は、縦やかに内彎気味に立ち上がる。	糸切り後ヘラナデ。		
2	内耳鍋 土師質土器	A (31.6)	口縁部片。内耳1か所残存。口縁部	体部内面ナデ。外面ヘラ面り。耳は	長石・雲母・砂粒 褐色 普通	P 4 覆土中 P L 4
		B (4.1)	部は平である。	口縁部と体部の境から貼り付け。		
3	壺 陶器	A (9.8)	口縁部片。体部上位に孔を持つ。体	内・外面ナデ。	長石・石英・雲母 赤褐色 普通	P 3 覆土中 P L 4
		B (4.1)	部は内彎し、口縁部は直立する。			
4	壺 陶器	A (14.0)	口縁部片。口縁部端に段を持つ。	口縁部内・外面ナデ。	長石・雲母・砂粒 灰赤色 普通	P 8 覆土中 P L 4 常清系
		B (1.3)				

図版番号	種別	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第9図5	砥石	3.0	4.7	2.2	101.7	凝灰岩	覆土中	Q 1 P L 7

3 堀

今回の調査により、当古墳群から堀 2 条が検出された。第37号堀は塚の遺構確認の段階で検出され、第42号堀は調査区北部のトレンチ調査により検出された。以下、検出された遺構について記載する。

第37号堀 (第6・10・11図)

位置 調査区南部, E1e3~E2c1区。

規模と形状 堀の両端が調査区域外に延びるため、正確な規模は不明である。南から北(N-5°-E)に(9.6)m延び、東に曲がり(N-86°-E)16.8m延び、南東に曲がり(E-21°-S)(17.3)m延びる。規模は上幅4.36~3.68m、下幅1.36~0.48m、堀底部から確認面までの比高は約2mである。

壁面 内壁45~50度、北壁45~60度の角度で立ち上がる。壁は締まりのあるロームで、堀下半は粘土である。

底面 ほぼ平坦であるが、底部の2か所に約1mの段差がみられる。

覆土 A-A', D-D'は17層、B-B', C-C'は19層からなる。堆積状況はブロック状であり、焼土粒子、炭化粒子及びロームブロックを含むことから人為堆積であると考えられる。

土層解説 (A-A', D-D')

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子・ローム小ブロック極少量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子・炭化粒子極少量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子・ローム小ブロック極少量
- 4 暗褐色 ローム粒子少量
- 5 暗褐色 ローム粒子少量、ローム中・小ブロック極少量
- 6 暗褐色 ローム粒子中量、炭化粒子・ローム小ブロック極少量
- 7 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・ローム小ブロック・スクリア極少量
- 8 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子・ローム小ブロック極少量
- 9 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子極少量

- 10 暗褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック極少量
- 11 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子・ローム小ブロック極少量
- 12 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子極少量
- 13 暗褐色 スクリア少量、ローム粒子極少量
- 14 暗褐色 ローム粒子中量、炭化物・ローム中・小ブロック極少量
- 15 暗褐色 ローム粒子多量、ローム中・小ブロック極少量
- 16 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック少量、ローム中ブロック極少量
- 17 暗褐色 ローム粒子多量、炭化粒子・ローム小ブロック極少量

土層解説 (B-B', C-C')

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック極少量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、焼土粒子・ローム中ブロック極少量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子・ローム小ブロック極少量
- 4 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、ローム中ブロック極少量
- 5 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック極少量
- 6 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック極少量
- 7 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、黒色土小ブロック極少量
- 8 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、焼土粒子極少量
- 9 暗褐色 ローム粒子少量、ローム中・小ブロック極少量
- 10 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子・ローム小ブロック・黒色土小ブロック極少量

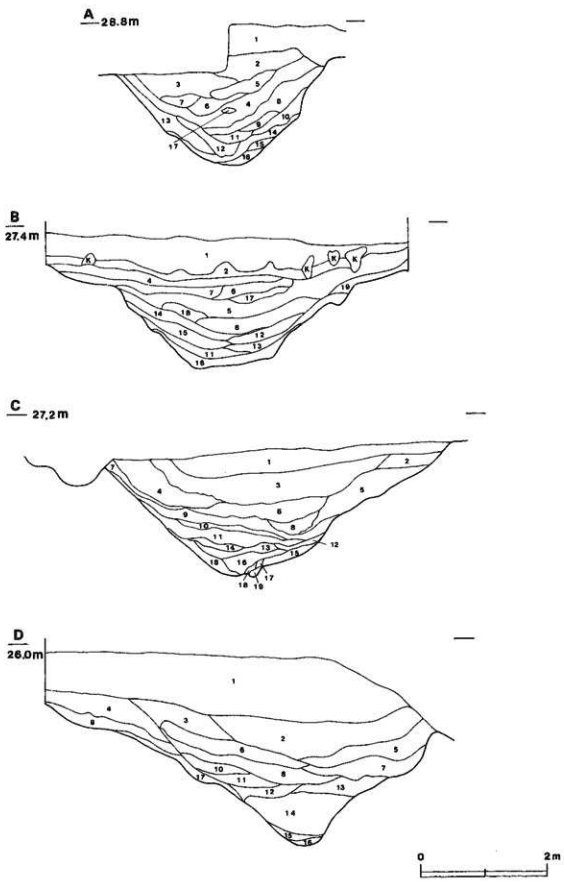
- 11 暗褐色 ローム粒子少量、ローム中ブロック極少量
- 12 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量
- 13 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック少量、ローム中・小ブロック極少量
- 14 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック少量、焼土粒子極少量
- 15 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック少量
- 16 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中・小ブロック極少量
- 17 暗褐色 砂中量、ローム粒子少量
- 18 暗褐色 砂多量、ローム粒子少量
- 19 暗褐色 ローム小ブロック少量

遺物 土師質土器片87点、砥石1点が出土している。第12図1・2は土師質の小皿、3は灯明受皿、4は香炉、5・6は指針、7~9は内耳鍋である。10は砥石である。いずれも覆土中からの出土である。

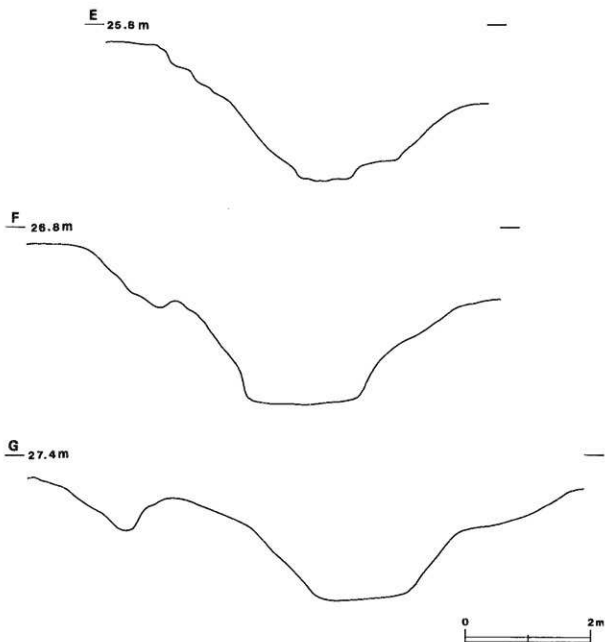
所見 旧地形の谷部が調査区北側から東側にかけて広がっている。本跡は第3号塚と谷部の間に掘られ東側の谷部に延びていると思われる。また、底部の段差は敵の侵入を防ぐ防禦施設ではないかと思われる。本跡は、位置及び出土遺物から長峰城に伴う堀と考えられる。

第37号堀出土遺物観察表

採取番号	品名	前照像(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・産成	図	考
第12図 1	小 皿 土師質土器	A (左)	体部から口縁部にかけての破片、平底、体部は、内湾気味に立ち上がり、口縁部は内湾している。	内・外面コタナギ。	灰白・砂粒に赤・褐色	P11	20%
		B (右)					
		C (上)					
2	小 皿 土師質土器	A (左)	体部から口縁部にかけての破片、平底、体部は、内湾気味に立ち上がり、口縁部は内湾している。	内・外面コタナギ。	灰白・砂粒に赤・褐色	P12	20%
		B (右)					
		C (上)					

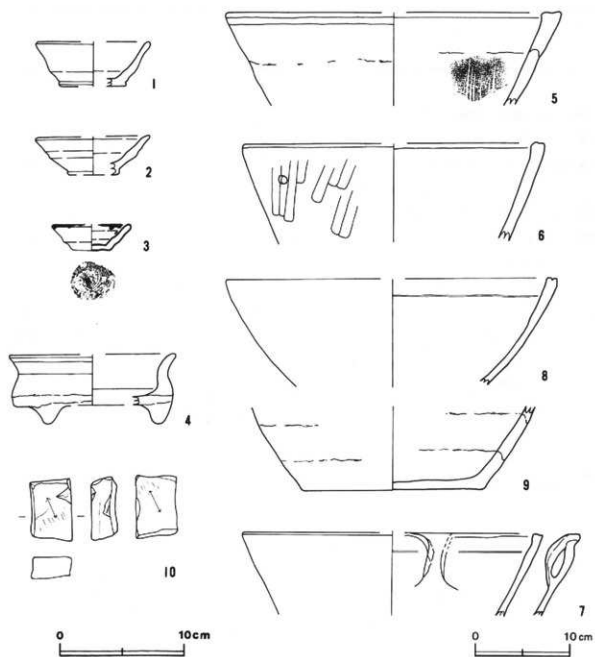


第10图 第37号堀実测图(1)



第11図 第37号掘実測図(2)

図面番号	器 種	計測値(m)	器 形 の 身 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・組成	備 考
第120 3	打切 受 皿 土胎質土器	A : 6.2 B : 2.0 C : 3.2	平底。体部は、内凹気味に立ち上がり口縁部にある。	内・外面クロコナテ、底面細転糸切り。	雲母・緑泥 褐色 普通	P11 履上中 P.L.4
4	盃 土胎質土器	A [13.2] B : 5.4 C [12.6]	底面から口縁部にかけての破片。体部は内凹気味に立ち上がり、底部から口縁部にかけて外反する。1足現存。	口縁部及び体部内・外面ナテ。底面外周に粘土塊による足を残り付け。	雲母・緑泥 褐色 普通	P16 履上小 P.L.4
5	罐 土胎質土器	A [26.8] D (7.3)	体部から口縁部にかけての破片。体部から口縁部にかけて直線的に突出。口縁部に指挿孔を持つ。	体部内・外面ナテ。5条以上のI字状の張り目。	長石・雲母・緑泥 灰白色 普通	P17 履上中 P.L.4
6	罐 土胎質土器	A [24.2] D : 7.8	体部から口縁部にかけての破片。体部から口縁部にかけて直線的に突出。口縁部に指挿孔を持つ。	体部内面ナテ、外面ヘラ張り。	石英・雲母 灰白色 普通	P18 履上中 P.L.4



第12図 第37号堀出土遺物実測図

図版番号	器種	寸法(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備	考
第12図 7	内耳 鉢 土師質土器	A (32.0) B (8.7)	内耳1か所残存。体部から口縁部にかけて内彎気味に立ち上がる。	体部内・外面ナデ。耳は口縁部と体部の境から貼り付け。	長石・石英・雲母 灰褐色 普通	P19 覆土中 P.L.4	10%
8	内耳 鉢 土師質土器	A (35.4) B (11.2)	体部から口縁部にかけての破片。体部は、内彎気味に立ち上がり口縁部にいたる。	体部内・外面ナデ。	長石・石英・雲母 に灰・赤褐色 普通	P20 覆土中 P.L.4	10%
9	内耳 鉢 土師質土器	B (6.5) C (34.4)	底部から体部にかけての破片。体部は内彎気味に立ち上がる。	口縁部内・外面ナデ。体部内・外面ナデ。	長石・石英・雲母 灰黄褐色 普通	P21 覆土中 P.L.4	35%

図面番号	種別	計測値				石質	出土品	層	考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)				
第12図10	瓦石	(5.0)	2.1	1.7	[54.1]	凝灰岩	覆土中	Q2	P.L7

第42号堀 (第6・13図)

位置 調査区東部, E1 d9~E1 j0区。

規模と形状 北東部が調査区域外に延びるため, 正確な規模は不明である。南から北 (N-5°-E) に (19.2) m延びる。上幅1.32~0.96m, 下幅0.80~0.44mで, 確認面との比高は1~2mである。

壁面 西側60~70度, 東側45~50度で立ち上がる。壁は締まりのあるロームで, 壁下半は粘土である。

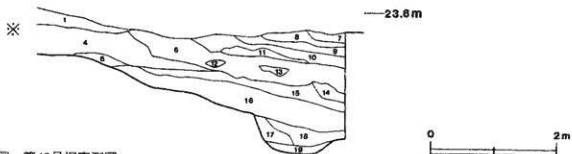
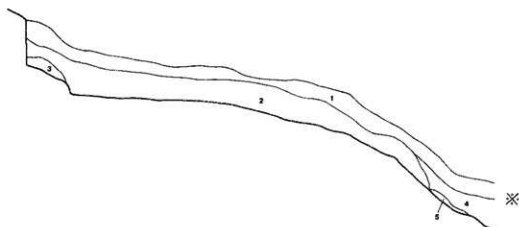
底面 本跡の南端は第37堀と接し, 北に延びている。調査区の北部で底面が確認できたのは, 第1号トレンチである。底面は平坦で北側に傾斜していると思われる。また底面はローム・粘土粒子を含む土を10cmほど埋め戻し底面を構築したと考えられる。

覆土 第1号トレンチ (T1) の上層は19層からなり, 堆積状況から旧地形は北側に向かい傾斜していることが分かった。1~16層は, 削平による土層である。本跡は, 17~19層で確認された。19層は構築時の基底面と考えられる。ローム・粘土ブロックを含有し, 不自然な堆積状況をしていることから人為堆積と考えられる。

第1号トレンチ土層解説 (H-H')

- | | |
|------------------------------------|--------------------|
| 1 黒褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, 炭化粒子極少量 | 4 暗褐色 粘土中・小ブロック極少量 |
| 2 深褐色 炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子極少量 | 5 褐色 粘土粒子多量 |
| 3 暗褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子極少量 | 6 暗褐色 粘土中・小ブロック少量 |

H
—26.6m

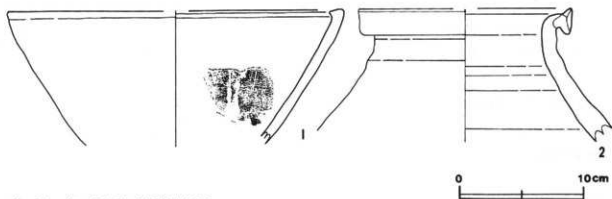


第13図 第42号堀実測図

7	にぶい黄褐色	粘土粒子・砂中量	14	黒褐色	炭化粒子・ローム粒子極少量
8	暗褐色	粘土粒子・砂少量	15	極暗褐色	ローム粒子少量、粘土粒子・スコリア極少量
9	暗褐色	粘土中ブロック中量、粘土小ブロック少量、砂極少量	16	極暗褐色	粘土粒子中量、粘土小ブロック少量、炭化粒子極少量
10	暗褐色	粘土中・小ブロック中量、粘土大ブロック少量	17	極暗褐色	粘土中ブロック・粘土粒子中量、ローム小ブロック少量
11	暗褐色	ローム中ブロック・粘土小ブロック中量、粘土中ブロック極少量	18	暗褐色	粘土粒子少量、ローム小ブロック・ローム粒子極少量
12	黄褐色	粘土中ブロック中量	19	黒褐色	ローム粒子・粘土粒子少量
13	暗褐色	粘土中ブロック少量			

遺物 土師質土器片9点が出土している。第14図1は土師質の搦鉢であり、2は陶器の甕である。いずれも覆土中から出土している。

所見 本跡の南端は第37号堀と接し、北側の旧地形の谷部に延びていると考えられる。第3号塚、第37号堀との位置関係及び出土遺物から、長峠城に伴う堀と考えられる。



第14図 第42号堀出土遺物実測図

第42号堀出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備	考
第14図 1	搦鉢 土師質土器	A (26.6) B (10.5)	体部から口縁部にかけての破片。体部は、内壁気味に立ち上がり、口縁部にはいる。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。	玄母・砂粒 にぶい赤褐色 普通	P22 覆土中 P.L.4	10%
2	甕 陶器	A (17.0) B (10.4)	体部から口縁部にかけての破片。口縁部には幅の広い粘土帯が走る。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。輪積み痕有り。	長石・砂粒 にぶい褐色 普通	P47 覆土中 P.L.4	5% 常設系

4 土坑

当古墳群から土坑2基が検出された。以下、検出された土坑について、その概要を記載する。

第186号土坑 (第15図)

位置 調査区の西南部、E1e3区。

規模と平面形 長軸1.92m、短軸1.25mの楕円形で、深さ28cmである。

長径方向 N-83°-E

壁面 外傾しながら立ち上がる。

底面 平坦である。

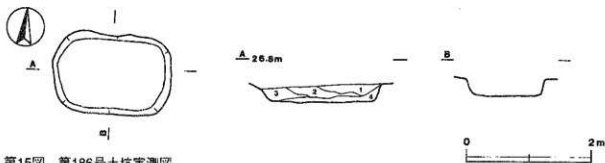
覆土 4層からなる。含有物やレンズ状の堆積状況から自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|---------------------------------|------|------------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、炭化粒子・炭化粒子極少量 | 3 褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子・ローム大・中・小ブロック極少量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子・ローム小ブロック極少量 | 4 褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子極少量 |

遺物 遺物は出していない。

所見 本跡の時期及び性格は不明である。



第15図 第186号土坑実測図

第187号土坑（第16図）

位置 調査区の南西部，E1f2区。

規模と平面形 長径2.50m，短径0.97mの不整形円形で，深さ118cmである。

長径方向 N-0°

壁面 はほぼ垂直に立ち上がる。

底面 平坦である。

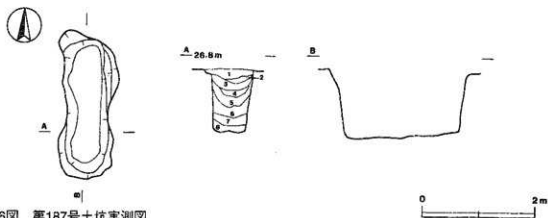
覆土 8層からなる。レンズ状の堆積状況から自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------------------|-------|--------------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子多量，炭化粒子・炭化粒子・ローム小ブロック極少量 | 5 褐色 | ローム粒子多量，ローム小ブロック少量，ローム中ブロック極少量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子多量，ローム小ブロック少量 | 6 褐色 | ローム粒子多量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子多量，ローム小ブロック少量，炭化粒子極少量 | 7 明褐色 | ローム粒子多量，ローム小ブロック極少量 |
| 4 褐色 | ローム粒子多量，ローム小ブロック少量 | 8 明褐色 | ローム粒子多量，ローム小ブロック少量 |

遺物 覆土中層から馬の歯が出している。

所見 馬の歯は，出土状況から埋設過程で投棄されたと思われる。本跡の時期及び性格は不明である。



第16図 第187号土坑実測図

5 遺構外出土遺物

当古墳群からは、試掘・表土除去・遺構確認の段階で縄文時代から近世にかけての遺構外遺物が出土している。ここでは、これらの出土遺物のうち特徴的なものについて実測図及び一覧表で掲載する。

(1) 縄文土器

本古墳群からの縄文時代の遺物数は少なく、早期・前期及び後期の土器片が数片出土している。

第17図27の口縁部片は、胎土に繊維が含まれ条痕文が施文されている。早期の茅山下層式に比定される。28は胎土に繊維が含まれ縄文が施文されている。前期の土器と思われる。29は突起貼付文が施された波状口縁部片で、後期の堀之内式に比定される。

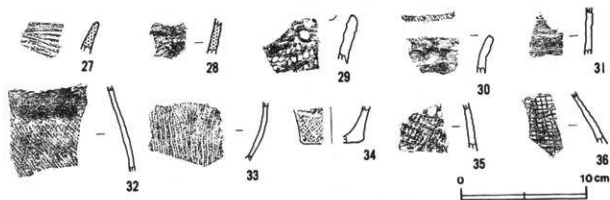
(2) 弥生土器

弥生時代の遺物は、壺の口縁部・体部及び底部片が少数出土している。

第17図30は口縁部片で、口唇部に縄文が押圧されている。31は口縁部片で、櫛歯状工具（5本）による波状文が施されている。32は頸部と胴部の境の部分の破片であり、頸部は無文帯で胴部には付加条一種（付加2条）が施文されている。33の胴部片、34の底部片はいずれも付加条一種（付加2条）が施文されている。これらの弥生土器はいずれも、弥生時代後期と考えられる。

(3) 須恵器

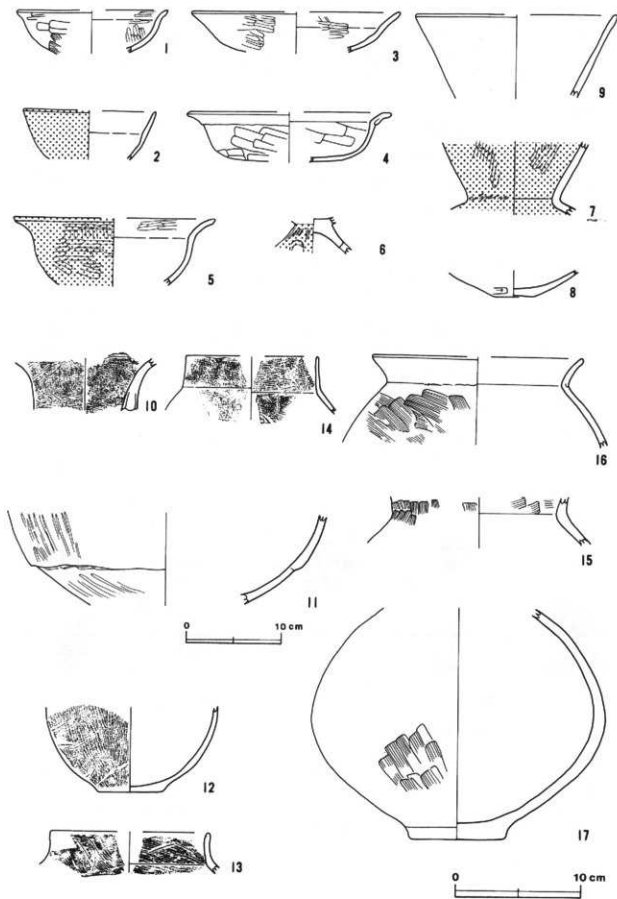
第17図35・36は須恵器甕の体部片と思われ、いずれも表面に格子の叩き痕が、内面に同心円状の当て具痕が見られる。いずれも古墳時代の須恵器と考えられ、当古墳群（長峰遺跡）に伴うものと思われる。



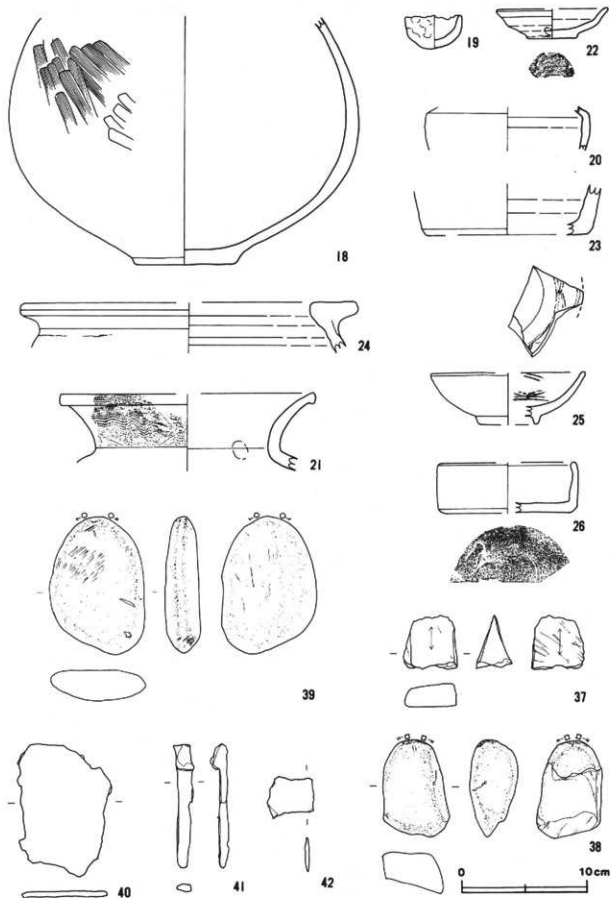
第17図 遺構外出土遺物実測図(1)

遺構外出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備	考
第18図 1	坏 土器器	A (12.0) B (3.3)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内野気味に立ち上がり、口縁部下端より外反する。	口縁部内・外面横位のヘラ磨き。体部内面へラ磨き、外面ハケ目調整後ヘラ磨き。	石灰・雲母にふい黄褐色 良好	P23 表採 P.L.4	20%
2	坏 土器器	A (16.6) B (3.9)	体部から口縁部にかけての破片。体部は、内野気味に立ち上がり、口縁部にいたる。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。外面赤彩。	雲母 明赤褐色 普通	P24 表採 P.L.4	20%



第18图 遼溝外出土遺物実測図(2)



第19圖 遼溝外出土遺物実測図(3)

図版番号	写 真	寸法(mm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・文様	備 考		
第14回	3	片 土 師 器	A (26.6) B (3.2)	底部から口縁部にかけての破片。体部は内彎矢状に立ち上がり、口縁部下端より外反する。	口縁部及び体部内・外面ヘラ磨き。	雪付 に灰・白色 普通	P25 表採 P.L.4	20%
4	片 土 師 器	A (16.0) B (3.9)	底面から口縁部にかけて内彎矢状に立ち上がり、口縁部を折り返しており、口縁部下端から外反する。	口縁部内・外面丁寧なナデ。体部内彎ナデ。外面ナデ。	長石・石英 赤褐色 普通	P26 表採 P.L.4	25%	
5	片 土 師 器	A (16.0) B (3.2)	底部から口縁部にかけての破片。体部は内彎し、口縁部下端より外反する。	口縁部内面・外面上半横位のヘラ磨き。外面下半横位のヘラ磨き。体部外面ヘラ磨き。内面調整がひどく不明。外面赤彩。	長石・石英・雲母 赤褐色 普通	P27 表採 P.L.4	30%	
6	片 土 師 器	B (1.8) K (2.2)	脚部片。脚部は「ハ」の字状に開く。脚部に3孔(底面1孔)。	器受部内面先端及び脚部外面ヘラ磨き。脚部内面ナデ。器受部内面及び脚部外面赤彩。	雲母・砂鉄 に灰・褐色 普通	P28 表採 P.L.5	20%	
7	片 土 師 器	B (3.7)	口縁部片。口縁部は外反する。	口縁部内・外面ヘラ磨き。赤彩。	石英・雲母 褐色 普通	P29 表採 P.L.5	5%	
8	片 土 師 器	B (2.0) C 3.1	底面から体部下位にかけての破片。底面はやや突出する。体部は、内彎しながら立ち上がる。	体部内・外面ナデ。底面外面ヘラ磨き。	長石・石英 赤褐色 普通	P30 表採 P.L.5	5%	
9	片 土 師 器	A (26.2) B (6.6)	口縁部片。口縁部は外反する。	口縁部内・外面とも調整がひどく不明。	雲母・砂鉄 褐色 普通	P31 表採 P.L.5	3%	
10	片 土 師 器	B (4.1)	口縁部片。底面口縁。口縁部は外反する。	口縁部内面ハケ目調整後ナデ。外面ハケ目調整。	砂鉄 褐色 普通	P33 表採 P.L.5	10%	
11	片 土 師 器	B (8.3)	体部下位の破片。体部が位に段を持つ。体部は、内彎しながら立ち上がる。	体部内面ナデ。外面上段横位のヘラ磨き。下段横位のヘラ磨き。	長石・雲母 に灰・白色 普通	P36 表採 P.L.5	5%	
12	片 土 師 器	B (4.9) C 3.0	底面から体部下位にかけての破片。底面はやや突出する。体部は、内彎しながら立ち上がる。	体部内面ナデ。外面ハケ目調整。底面ナデ。	石英・雲母赤色砂子 に灰・褐色 普通	P39 表採 P.L.5	15%	
13	片 土 師 器	A (12.6) B (3.3)	体部上段から口縁部にかけての破片。体部は内彎し、底面から直立し口縁部にいる。	口縁部内面横位のハケ目調整。外面ナデ。体部外面ハケ目調整。	雲母 に灰・褐色 普通	P31 表採 P.L.5	5%	
14	片 土 師 器	A (10.5) B (4.8)	体部上段から口縁部にかけての破片。体部は内彎し、頸部から直立し口縁部にいる。	口縁部内・外面ハケ目調整。体部内面ナデ。外面ハケ目調整後ナデ。	石英 に灰・褐色 普通	P32 表採 P.L.5	5%	
15	片 土 師 器	B (3.9)	頸部片。体部は内彎し、頸部で「く」の字状に外反する。	頸部内面ハケ目調整。上位ナデ。下位より体部にかけてハケ目調整。	長石・石英 褐色 普通	P37 表採 P.L.5	5%	
16	片 土 師 器	A (16.8) B (6.9)	体部上段から口縁部にかけての破片。体部は内彎し、頸部で「く」の字状に外反し口縁部にいる。	口縁部内・外面ナデ。体部内面ナデ。外面ハケ目調整。	石英・雲母 褐色 普通	P38 表採 P.L.5	10%	
17	片 土 師 器	B (18.3) C 7.4	口縁部欠損。底面はやや突出する。体部は、内彎しながら立ち上がる。	体部内面ナデ。外面ハケ目調整。	長石・石英・赤色砂子 褐色 普通	P40 表採 P.L.5	42%	
第15回	18	片 土 師 器	B (19.5) C 8.0	口縁部欠損。底面はやや突出する。体部は、内彎しながら立ち上がる。	体部内面ナデ。外面ハケ目調整。底面ナデ。	長石・石英・赤色砂子 に灰・褐色 普通	P41 表採 P.L.5	70%
19	片 土 師 器	A 4.5 B 2.6	丸皿。体部は、半球状で上段に最大径を持つ。	体部内面ナデ。外側横位ナデ。	長石・石英・赤色砂子 褐色 普通	P42 表採 P.L.5	80%	
20	片 土 師 器	B (3.5)	体部片。体部上段から内彎する。	内・外面口縁ナデ。	長石・褐色砂子 灰黄褐色 普通	P45 表採 P.L.5	5%	

図版番号	種 別	寸法 (cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	土質・色調・紋様	備 考
第19図 21	覆 須 志 器	A (30.0) B (6.1)	胴部から口縁部にかけての腹片。胴部から外反しながら口縁部にいる。腹部に深を付す。	内・外面にクロナダ。胴部及び頸部外面に縁波状文。腹部の縁面は4本1単位。	赤母・赤色粒 灰赤褐色 普通	P13 表上 P.L.5 5%
22	小 土 師 器	A (8.8) B 2.3 C (4.0)	平底。腰部は、内彎気味に立ち上がる。	内・外面にクロナダ。底部回転糸切り。	石灰・赤色赤色 淡黄褐色 普通	P46 表上 P.L.5 45%
23	香 瓦 土 器	B (3.9) C (13.0)	底片から腰部にかけての腹片。器壁は厚い。腰部は、外反しながら立ち上がる。	内・外面にクロナダ。底部回転ヘラ切り。	赤母・砂粒 に赤・黄褐色 普通	P44 表上 P.L.5 5%
24	美 土 師 器	A (26.4) B (3.9)	腰部から口縁部にかけての腹片。腰部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は平らである。	内・外面ナダ。	石灰・砂粒 に赤・黄褐色 良好	P10 表上 P.L.1 5%
25	袋 付 土 師 器	A (12.3) B 4.1 D (4.8) E 0.6	腰部は、緩やかに内彎しながら口縁部にいる。	花込みに輪の日輪筋が、断れ砂付留。袋付け半透明保。	長石 灰白色 良好	P 6 表上 P.L.5 地産系 5%
26	小 土 師 器	A (10.0) B 5.0 C (10.0)	平底。腰部は、筒形を呈し口縁部に至る。	透明釉。底部回転糸切り。	長石・赤母 暗赤褐色 普通	P 5 表上 P.L.4 30%

図版番号	種 別	石 質				出 土 地 点	備 考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
第19図 27	瓦	(4.2)	2.9	1.9	(43.0)	凝灰岩	表採 Q 3 P.L.7
28	瓦	(7.6)	(3.9)	(3.3)	(180.1)	砂岩	表採 Q 4 P.L.7
29	瓦	10.7	2.9	2.6	(326.7)	砂岩	表採 Q 5 P.L.7

図版番号	種 別	土 質				出 土 地 点	備 考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
第19図 40	不明瓦製品	10.5	7.3	0.5	111.3	表採	M 1 P.L.7
41	不明瓦製品	9.4	1.2	1.0	29.6	表採	M 2 P.L.7
42	不明瓦製品	(3.8)	(3.1)	0.3	(9.0)	表採	M 3 P.L.7

第3節 まとめ

今回の調査で検出された遺構は、古墳周溝1基、塚1基、堀2条及び土坑2基である。古墳は6世紀中葉頃、塚及び堀は中世の遺構と考えられる。ここでは、遺構とそれに伴って出土した遺物について概要を述べ、まとめたい。

古墳時代

昭和61・62年度の長峰遺跡の調査で円墳30基（円墳と考えられる1基を含む）、方墳2基、前方後円墳4基の36基の古墳が調査された。これらの古墳は、6世紀前半頃から土師器や形象埴輪を伴う円墳・前方後円墳が造られ、その後順次7世紀初頭にかけて構築されたと考えられる。このうち6基の古墳から円筒埴輪、朝顔形円筒埴輪が出土している。円筒埴輪は突帯数が3本で、突帯は台形状の断面形をしており、後縁が不明確なものが多い。透孔は下から1本目と2本目の突帯間（2段目）に1対あるものと、下から2本目と3本目の突帯間（3段目）に1対あるもの、2・3段にそれぞれ1対ずつあるものに分けられる。朝顔形円筒埴輪は、上部

にくびれを持ち、基部に比べ口径が著しく大きく、突帯は三本で、2・3段目にそれぞれ1対の透孔がある。長峰遺跡出土の埴輪には、このような共通点が見られる。このことから、同一集団の工人によって埴輪の製作が行われたと考えられる。

今回の調査で、堀溝から出土した円筒埴輪、朝顔形埴輪は、全体を復元できた埴輪がないため正確な形態は不明であるが、突帯及び透孔の位置から考えると、突帯が3本、断面形状は突出の低い台形で幅1cm以上あり、長峰遺跡出土の埴輪と特徴が似ている。また、出土した埴輪片の中には須恵質埴輪も含まれていた。第37号墳の周溝から出土した埴輪は、透孔は円形で、突帯は幅1cm以上の太身タイプで断面形状は突出の低い台形であり、6世紀中葉頃の特徴を有した埴輪であると考えられる。

中世

中世の遺構は、長峰城の一部と考えられる。長峰城は「諸國武勇家文書」や「東国關戦私記」等において、土岐原氏家臣の長峯（峰）民部の名が散見される。土岐原氏は、16世紀半ばまで信太莊、東条莊、河内郡の南部（龍ヶ崎・駒馬一帯）を支配下に置いたが、天正18年（1590）の小田原の陣で北条氏側につき、北条氏の滅亡により、豊臣秀吉に所領は没収された。土岐原氏の所領の大半は芦名義広に与えられ、江戸崎城を本城、龍ヶ崎城を支城とした。その過程で長峰城を含む中小城郭は放棄されたと考えられている。

長峰城跡は、標高約27mの台地東端部に位置しており、南が低地で東から北にかけて幅500m前後の広い谷が通っている。前回の長峰遺跡の調査において、長峰城の一部と考えられる塚2基、堀7条、溝1条が検出され、長峰城は従来考えられているより西に外郭を設け、城の防備体制を充実させていたと考えられる。堀はいずれも舌状台地を掘り切って構築されていると考えられる。塚は櫓台として物見に利用されたと考えられる。

今回の調査は、前回の調査が行われた場所の東側に位置しており長峰城跡に隣接している。検出された中世の遺構は、塚1基、堀2条であり、遺物は、土師質土器（小皿、内耳鍋等）が出土している。第3号塚は、台地南縁辺部にあり、南部に広がる低地を一望できる位置に構築されており、櫓台として物見に使われたと考えられる。第37号堀は、塚の北側を東西に掘られており、堀の底部には2か所に段差が造られている。第42号堀は第37号堀から北側に分かれている。堀は調査区域外に延びているので正確な形状は不明であるが、台地を掘り切り郭を構成している可能性が考えられる。いずれの遺構も、長峰城の城域の一部を構成する外郭ではないかと考えられる。

註

(1) 塩谷 修「龍ヶ崎浦沿岸の埴輪 - 5・6世紀の埴輪生産と埴輪祭祀 -」

『龍ヶ崎の百長 - 古墳にみる水辺の権力者たち -』龍ヶ崎町郷土資料館 1997年8月

参考文献

- ・龍ヶ崎市史編さん委員会『龍ヶ崎市史 中世編』1998年3月
- ・龍ヶ崎市史編さん委員会『龍ヶ崎市史 中世資料編 別冊』1994年3月
- ・茨城県教育財団「龍ヶ崎ニュータウン内歴史文化財調査報告書19」『茨城県教育財団調査報告』第58集 1990年3月

第4章 屋代B遺跡

第1節 遺跡の概要

屋代B遺跡は、龍ヶ崎市の北部、標高23～24mの種敷台地上の南端部に位置する。屋代B遺跡の調査は、昭和58年度から昭和61年度にかけて行われ、弥生時代から中世にかけての遺構及び遺物が確認されている。今回は、前回までの調査区の南東部に位置し、未調査部分であった第3・4号土塁について調査を行った。本跡の現況は竹林で、調査面積は397㎡である。当跡の北東側には屋代A遺跡が調査区を接している。

今回の発掘調査によって、土塁2基、堀2条、土坑1基及びピット群1か所が検出された。

遺物は、遺物収納コンテナ（60×40×20cm）に1箱山土した。遺物は、土師質土器、陶器、五輪塔等が出土している。

第2節 遺構と遺物

1 土塁

前回の調査で本跡の東側部の調査が行われ、土塁が構築された後に改修を行っていることが確認された。今回は、前回に未調査であった部分の調査である。本跡の調査は、構築状況を確認するため土塁を縦断する南北方向の第1～3・5号トレンチと、横断する東西方向の第4号トレンチを設定して掘り下げた。

第3・4号土塁（第20～22図）

位置 II5h0～I6b5区にかけて確認した。本跡は屋代城主郭の南東部に位置しており、東側及び南側に前回の調査で検出された第8号堀があり、北側に第23・24号堀がある。

平面形 「L」字状である。

規模及び方向 土塁の南東部が造成工事により削平されている。確認できる土塁の規模は、南東から北西（N-72°-W）に25.3m延び、そこから直角に曲がり北東（N-34°-E）に18.1m延びる。土塁の基底部幅は5.2～14.0m、頂上部幅2.0～5.5m、頂上部標高24.8～25.4m、土塁の頂上部と第8号堀との比高は2.2～2.5mである。斜度は土塁南側（城外）は40～55度、北側（城内）は35～85度である。

構築状況 各トレンチにおいて盛土の状況を見ると、旧地形を基底部としている。基底部は自然地形を利用し、堀を掘削する際、土塁部分を削り残して見掛け状の土塁としている。その上にロームブロックやローム粒石を含む褐色土、暗褐色土及び黒色土を交互に盛土している。これらの土は自然堆積の土層と状況が逆転していることから、土塁の周囲に掘られた堀からでた土を利用したものと考えられる。

遺物 土師質土器片55点、陶器片15点、石製品1点が出土している。第23図1の土師質の小皿、4の灯明受皿、5・6の播鉢、7・10の内耳鍋は、第5トレンチの盛土中から出土している。2の小皿は、第2トレンチ盛土下層から出土している。3の皿は、第3トレンチの盛土中から出土している。8・11の内耳鍋は、土塁西部の頂上部表土から、9の内耳鍋は、第3トレンチの盛土下層から出土している。12の陶器の片口鉢、15・第24図14の常滑系陶器の甕は、第5トレンチの盛土中から出土している。13の常滑系陶器の甕は、第2トレンチの盛土下層から出土している。16の五輪塔（地輪）は、第3号トレンチ盛土下層から出土している。

所見 第4号土層が構築された後、城の拡張・整備に伴い城の防壁強化のため第3号土層が第4号土層を基部として構築されている。また、土層上からピットが検出され、建物・溝列等が構築されていた可能性が考えられる。土層は信仰の塚として近年まで使われ、頂上部に祠が祭られていた。

第1号トレンチ (T1) (第20・21図)

第1号トレンチは、調査区東側に設定した。トレンチは、幅2m、長さ12.3m、深さ3.0mで、土層は21層からなる。1層は表土層である。4層は当時の地表面で土層の基底部にあたる。3層は土層を構築する際に最初に積み上げられた部分であり、締まった層になっている。5～21層は堀の覆土である。2・5～10層は第23号堀の覆土で、褐色土と暗褐色土はロームブロック及びローム粒子を含み不自然な堆積をしており人為堆積と考えられる。8・11～20層は第24号堀の覆土で、ロームブロック及びローム粒子を含みブロック状の堆積をしていることから人為堆積と考えられる。堆積状況から、第23号堀が埋められた後に第24号堀が埋め戻されていることが確認できた。2・3・5・6・21層は第8号堀の覆土で、褐色土と暗褐色土はロームブロック及びローム粒子を含み、堆積状況が不自然なため人為堆積と考えられる。

第1号トレンチ土層解説 (A-A')

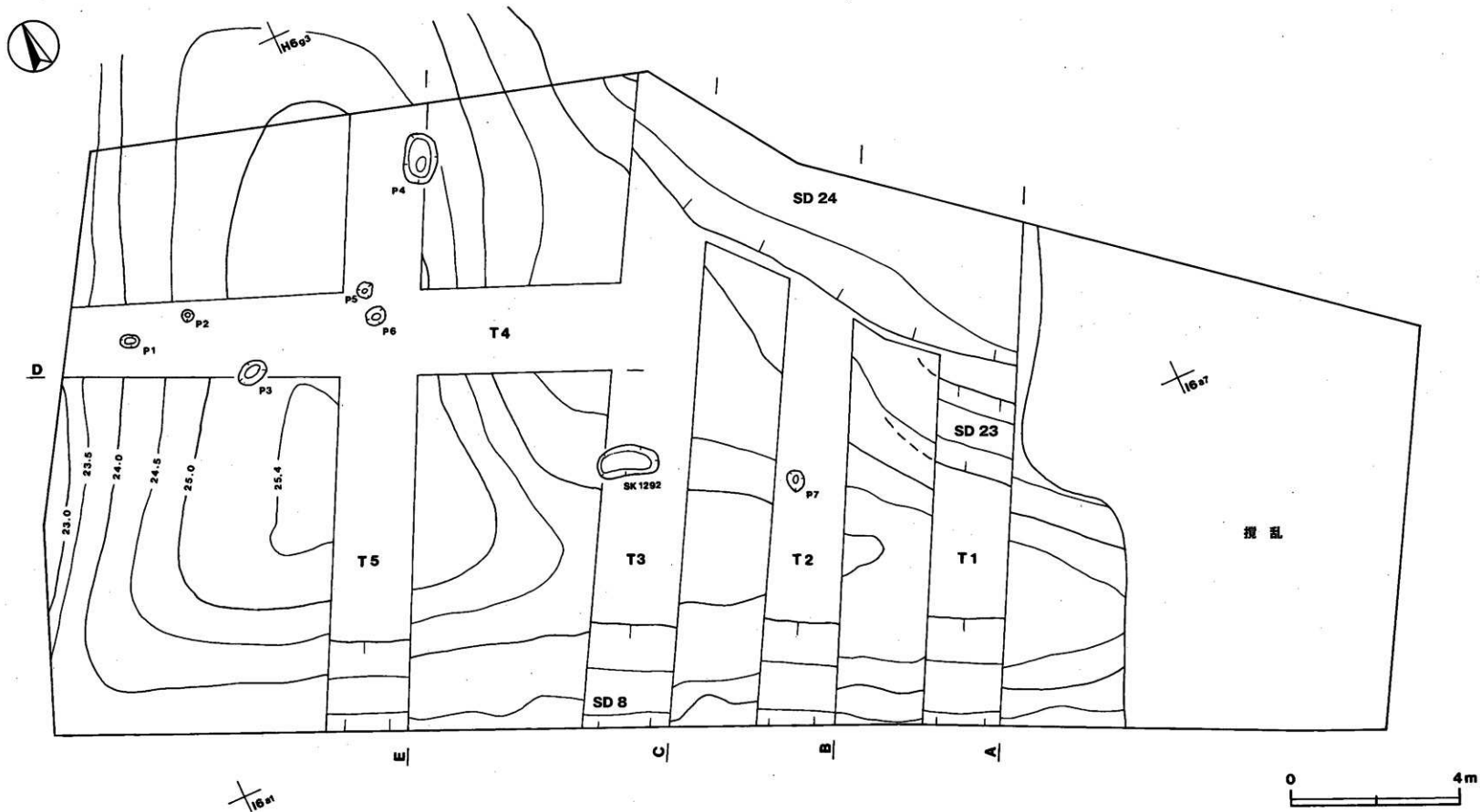
1	暗褐色	ローム粒子少量 (表土)	11	褐色	ローム粒子・粘土粒子中量、ローム中ブロック少量
2	暗褐色	ローム粒子多量、ローム大・小ブロック中量、ローム中ブロック少量、炭化粒子微量	12	褐色	ローム粒子中量、ローム中ブロック・粘土粒子少量
3	黒褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック微量	13	暗褐色	ローム粒子中量、ローム中ブロック・粘土粒子少量、ローム中ブロック微量
4	暗褐色	ローム粒子中量、ローム小ブロック少量	14	褐色	ローム粒子多量、ローム中・小ブロック・粘土中・小ブロック中量
5	褐色	ローム粒子中量、ローム小ブロック少量	15	暗褐色	ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、炭化粒子微量
6	褐色	ローム小ブロック・ローム粒子中量、焼土粒子・粘土粒子微量	16	褐色	ローム小ブロック・ローム粒子中量
7	褐色	ローム粒子中量、ローム中・小ブロック少量	17	褐色	ローム粒子・粘土粒子中量
8	にぶい黄褐色	粘土ブロック多量	18	褐色	ローム粒子中量、ローム小ブロック・粘土小ブロック少量
9	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子中量、焼土粒子・ローム中ブロック微量	19	暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子微量
10	褐色	ローム粒子・粘土小ブロック・粘土粒子中量、ローム小ブロック少量、焼土粒子微量	20	褐色	ローム粒子中量
			21	暗褐色	炭化粒子・ローム小ブロック微量

第2号トレンチ (T2) (第20・21図)

第2号トレンチは、第1号トレンチの西側に2mの間隔を置いて設定した。トレンチは、幅2m、長さ13.3m、深さ1.94mで、土層は26層からなる。16層は表土層である。13層は旧地表面で土層の基底部にあたる。12・14・15層は土層の盛土で、ロームブロック及びローム粒子を含み突き固めたように締まっている。1～7層は第24号堀の覆土で、ローム粒子を含みブロック状の堆積状況から人為堆積と考えられる。17～26層は第8号堀の覆土である。24・25層はロームブロック及びローム粒子を含み、固く締まっている状況から構築時の底面と考えられる。17～23層はロームブロックを含んでおり、褐色土と暗褐色土の不自然に堆積していることから人為堆積と考えられる。

第2号トレンチ土層解説 (B-B')

1	暗褐色	ローム粒中量、ローム小ブロック少量、炭化粒子微量	15	暗褐色	ローム小ブロック少量、焼土粒子微量
2	褐色	ローム粒子多量、炭化粒子微量	16	暗褐色	ローム小ブロック少量 (表土)
3	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量、ローム中ブロック微量	17	褐色	ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、炭化粒子・ローム大・小ブロック微量
4	褐色	ローム粒子多量、ローム小ブロック少量	18	褐色	ローム粒子多量、ローム中・小ブロック少量
5	褐色	ローム粒子中量、ローム中・小ブロック少量	19	暗褐色	ローム小ブロック少量、ローム大ブロック微量
6	褐色	炭化粒子・ローム粒子少量、ローム小ブロック微量	20	暗褐色	焼土粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量
7	褐色	炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量、ローム中ブロック微量	21	暗褐色	ローム小ブロック中量、ローム粒子少量、炭化粒子微量
8	褐色	ローム粒子中量 (ソフトローム層)	22	褐色	ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック少量
9	暗褐色	炭化物・ローム小ブロック少量、ローム粒子微量	23	褐色	ローム小ブロック・ローム粒子多量、炭化粒子・ローム大ブロック微量
10	暗褐色	ローム小ブロック少量、ローム粒少量	24	褐色	ローム小ブロック・ローム粒子中量、炭化粒子・ローム中ブロック微量
11	褐色	ローム粒子中量、ローム小ブロック少量	25	褐色	ローム小ブロック・ローム粒子中量、炭化粒子・ローム中ブロック微量
12	暗褐色	焼土粒子・ローム粒子少量、ローム小ブロック微量	26	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子微量
13	暗褐色	ローム粒子少量、ローム中・小ブロック微量			
14	黒褐色	ローム中・小ブロック少量、焼土粒子・ローム粒少量			



第20图 调查区域全图

第3号トレンチ (T3) (第20・22図)

第3号トレンチは、第2号トレンチの西側に2mの間隔を置いて設定した。トレンチは、幅2m、長さ13.6m、深さ2.15mで、上層は24層からなる。1層は表土層である。6層はソフトローム層であり、4層が旧地表面で土塁の基底部となる。2・3層は上層の盛土である。21~24層は第24号堀の覆土で、含有物及び堆積状況から人為堆積と考えられる。9・10・12~19層は第8号堀の覆土である。19層はローム粒子を含み固く締まっている状況から、堀の構築時の底面と考えられる。9・10・12~18層はロームブロック及びローム粒子を含んでおり、褐色土上や暗褐色土がブロック状に堆積していることから人為堆積と考えられる。

第3号トレンチ土層解説 (C-C')

1 暗褐色	ローム小ブロック少量 (表土)	13 暗褐色	ローム小ブロック中量、ローム中ブロック・ローム粒子少量
2 褐色	ローム粒子多量、ローム小ブロック微量	14 暗褐色	ローム小ブロック中量、ローム粒子少量、焼土粒子・ローム中ブロック微量
3 暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量、ローム中ブロック微量	15 黒褐色	ローム中・小ブロック・ローム粒子少量
4 暗褐色	ローム粒子少量、ローム中・小ブロック微量	16 暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量
5 暗褐色	ローム粒子少量、炭化粒子・ローム大・小ブロック微量	17 褐色	ローム粒子多量、ローム小ブロック少量、ローム中ブロック微量
6 褐色	ローム粒子中量 (ソフトローム層)	18 褐色	ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、ローム中ブロック微量
7 褐色	ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、炭化粒子・ローム中ブロック微量	19 暗褐色	ローム粒子中量
8 褐色	ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム大ブロック少量	20 暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子微量
9 褐色	ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム大・中ブロック少量	21 暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量、ローム中ブロック微量
10 褐色	ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、炭化粒子・ローム大・中ブロック少量	22 褐色	ローム小ブロック・ローム粒子中量、ローム中ブロック少量
11 暗褐色	ローム小ブロック中量、炭化粒子・ローム中ブロック微量	23 褐色	ローム中ブロック・ローム粒子中量
12 暗褐色	ローム小ブロック中量、ローム中・小ブロック少量、炭化粒子微量	24 褐色	炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量、ローム中ブロック微量

第4号トレンチ (T4) (第20・22図)

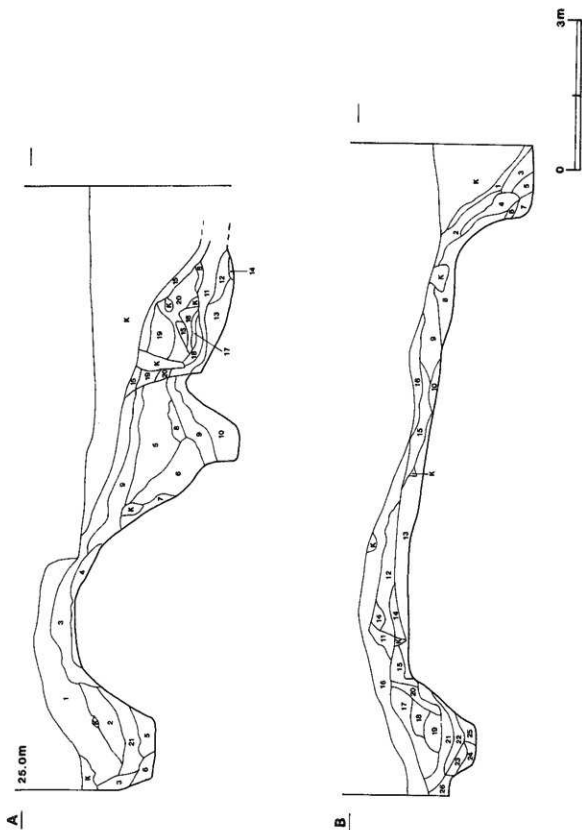
第4号トレンチは、第3・5号トレンチと直角に東西に設定した。トレンチは、幅2m、長さ13.9m、深さ1.36mで、十層は14層からなる。1層は表土層である。10・11層は旧地表面の表土で上層の基底部となる。上層の盛土は褐色土と暗褐色土を交互に積み上げている。土層断面から、4・9層と3・14層を境に西側2・4・5~9層と、東側3・12~14層の構築状況の違いが見られる。前回の調査成果から考察すると、西側の第4号土塁が構築され、後に東側の第3号土塁が構築されたと考えられる。

第4号トレンチ土層解説 (D-D')

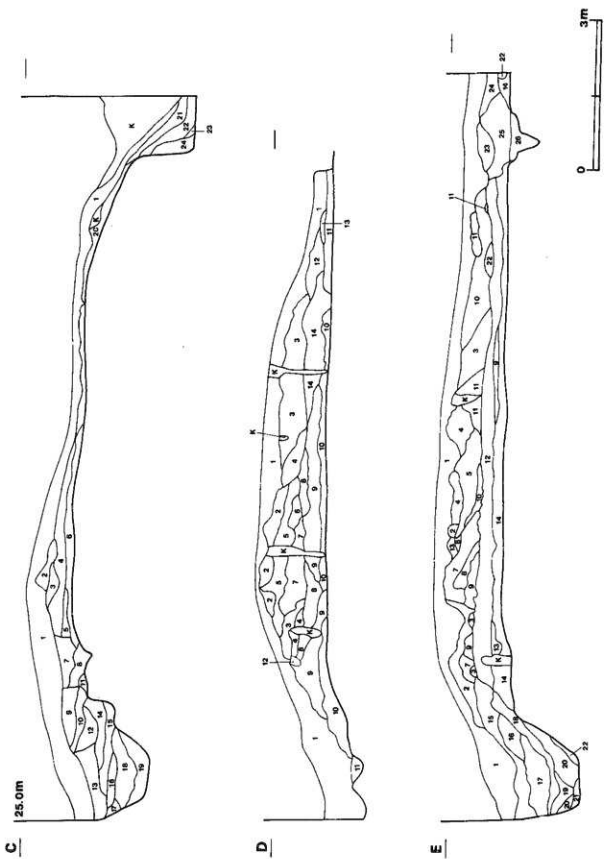
1 暗褐色	ローム小ブロック少量 (表土)	7 褐色	ローム小ブロック・ローム粒子中量、炭化粒子・ローム大・中ブロック微量
2 に近い褐色	ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、炭化粒子・ローム中ブロック微量	8 黒褐色	炭化粒子中量、ローム小ブロック少量、焼土中・小ブロック・ローム粒子微量
3 褐色	炭化物・ローム中・小ブロック・ローム粒子中量、炭化粒子・粘土粒子少量、焼土粒子微量	9 黒褐色	ローム小ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
4 褐色	ローム小ブロック・ローム粒子中量、炭化物・炭化粒子・ローム中ブロック少量、ローム大ブロック微量	10 暗褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量
5 暗褐色	ローム小ブロック中量、炭化粒子・ローム粒子少量	11 暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子微量
6 褐色	ローム小ブロック多量、ローム粒子中量、焼土粒子・ローム中ブロック少量	12 暗褐色	ローム粒子・粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
		13 褐色	ローム粒子微量
		14 暗褐色	ローム粒子少量

第5号トレンチ (T5) (第20・22図)

第5号トレンチは、第3号トレンチの西側に4mの間隔を置いて設定した。トレンチは、幅2m、長さ12m、深さ2mで、土層は26層からなる。14層は旧地表面で土塁の基底部にあたる。上層の盛土は、褐色土と暗褐色土及び黒褐色土を交互に積み上げている。土層断面から5・12層と10・13層を境に南側の2~9・11・12層が第4号土塁で、北側の10・11・13、22~25層が第3号土塁の盛土と考えられる。南側の2・15~22層は第8号堀の覆土で、ロームブロック及びローム粒子を含んだ褐色土と暗褐色土が交互にブロック状に堆積していることから、人為堆積と考えられる。



第21図 第1・2号トレンチ実測図



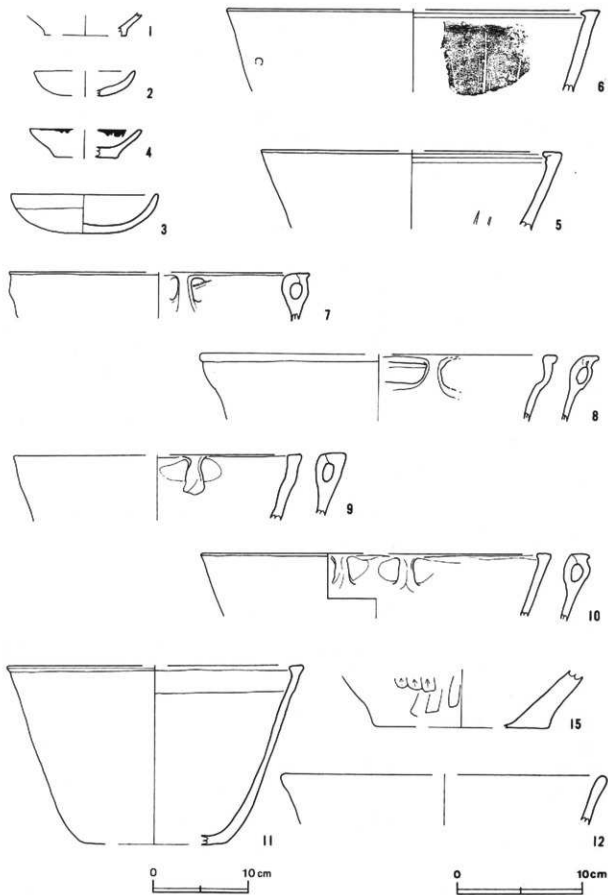
第22図 第3～5号トレンチ実測図

第5号トレンチ土層解説 (E-E')

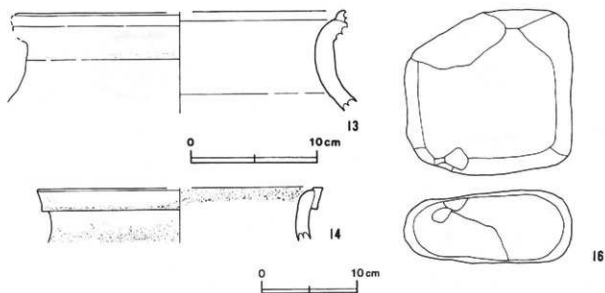
1	褐色	ローム小ブロック少量	13	黒色	ローム小ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
2	褐色	ローム小ブロック、ローム粒子少量、炭化粒子・ローム中ブロック微量	14	暗褐色	ローム小ブロック中量、ローム粒子少量、炭化粒子微量
3	褐色	ローム小ブロック中量、炭化粒子微量	15	暗褐色	炭化粒子・ローム中・小ブロック・ローム粒子微量
4	暗褐色	ローム小ブロック中量、ローム中ブロック少量、炭化粒子微量	16	褐色	ローム大・小ブロック・ローム粒子中量、炭化粒子少量
5	褐色	炭化物・ローム中・小ブロック・ローム粒子中量、炭化粒子・粘土粒子少量、焼土粒子微量	17	黒色	焼土粒子・炭化物・炭化粒子微量
6	褐色	ローム小ブロック・ローム粒子中量、炭化粒子・ローム中ブロック微量	18	暗褐色	炭化粒子・ローム小ブロック微量
7	褐色	ローム中・小ブロック・ローム粒子中量	19	暗褐色	ローム粒子少量
8	黒褐色	ローム小ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	20	暗褐色	炭化物・ローム中・小ブロック少量、ローム大ブロック微量
9	褐色	ローム小ブロック・ローム粒子中量、ローム中ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	21	暗褐色	ローム中ブロック・ローム粒子少量
10	暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック微量	22	暗褐色	ローム中ブロック少量、ローム粒子微量
11	にぶい褐色	ローム小ブロック・ローム粒子中量、炭化粒子・ローム大・中ブロック少量、粘土粒子微量	23	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子・粘土小ブロック少量、焼土粒子微量
12	暗褐色	ローム粒子少量	24	暗褐色	焼土粒子・炭化粒子微量
			25	褐色	粘土小ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子微量
			26	褐色	ローム粒子中量

第3・4号土層出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	形態の特徴	手法の特徴	胎土・色澤・焼成	備考
第23図	小 Ⅲ 土師瓦土器	D : 1.7 C : 6.6	体部片。底部はやや突出した平底。体部は外側しながら立ち上がる。	体部内・外面クロクナテ。	長石・雲母・赤色粒子 浅黄褐色 普通	P 1 45% 第5トレンチ覆土中
		A (8.0) B (1.9)	丸底。体部は内側気味に立ち上がり、口縁部は内側にある。	口縁部内・外面黒ナテ。体部内・外面ナテ。	長石・石英・雲母 明赤褐色 普通	P 2 25% 第2トレンチ覆土上層 P L 10
3	Ⅲ 土師瓦土器	A 11.6 B 3.1	丸底。体部は内側気味に立ち上がり、口縁部は内側にある。	口縁部内・外面黒ナテ。体部内・外面ナテ。	長石・雲母・白色粒子 褐色 普通	P 4 60% 第3トレンチ覆土中 P L 10
		A (9.0) B 2.3 C (4.8)	底部はやや突出した平底。体部は外側しながら立ち上がる。口縁部は内側にある。	口縁部及び体部内・外面クロクナテ。	長石・雲母・赤色粒子 褐色 普通	P 3 30% 第3トレンチ覆土中 P L 10 覆部に埋存否
5	Ⅲ 土師瓦土器	A (24.0) B (6.2)	体部上段から口縁部にかけての破片。体部は外側する。口縁部内面に線を付す。	口縁部内・外面黒ナテ。体部内・外面ナテ。	長石・雲母・砂粒 にぶい赤褐色 普通	P 3 5% 第3トレンチ覆土中 P L 10
		A (28.8) B (6.5)	体部上段から口縁部にかけての破片。体部は外側する。口縁部内面に線を付す。	口縁部内・外面黒ナテ。体部内・外面ナテ。	長石・石英・雲母 明赤褐色 普通	P 6 5% 第3トレンチ覆土中 P L 10
7	内 Ⅲ 土師瓦土器	A (21.6) B (2.0)	口縁部片。内耳1か所現存。口縁部は平直である。	体部内・外面ナテ。耳は口縁部と体部の境から貼り付け。	石英・雲母・砂粒 にぶい褐色 普通	P 7 5% 第5トレンチ覆土中 P L 10
		A (38.0) B (7.0)	口縁部片。内耳1か所現存。体部は外側しながら立ち上がる。	体部内・外面ナテ。耳は口縁部と体部の境から貼り付け。	石英・雲母・赤色粒子 褐色 普通	P 8 5% 上部内器直上表土 P L 10
9	内 Ⅲ 土師瓦土器	A (31.4) B (6.8)	体部上段から口縁部にかけての破片。内耳1か所現存。体部は外側しながら口縁部は内側にある。	体部内・外面ナテ。耳は口縁部と体部の境から貼り付け。	長石・雲母・砂粒 褐色 普通	P 9 5% 第3トレンチ覆土上層 P L 10
		A (37.0) B (6.8)	体部上段から口縁部にかけての破片。内耳1か所現存。体部は外側しながら口縁部は内側にある。	体部内・外面ナテ。耳は口縁部と体部の境から貼り付け。	長石・雲母・砂粒 明赤褐色 普通	P 10 10% 第5トレンチ覆土中 P L 10
11	内 Ⅲ 土師瓦土器	A (31.4) B 18.8 C (14.2)	体部は、外側しながら口縁部は内側にある。	口縁部内・外面黒ナテ。体部内・外面ナテ。	長石・雲母・砂粒 明赤褐色 普通	P 11 20% 土器直上表土 P L 10
		A (26.0) B (4.0)	体部上段から口縁部にかけての破片。体部は外側しながら口縁部は内側にある。	口縁部内・外面黒ナテ。体部内・外面ナテ。	長石・石英 褐色 普通	P 13 5% 第5トレンチ覆土中 P L 10
第24図	Ⅲ 土師瓦土器	A (26.0) B (8.0)	体部上段から口縁部にかけての破片。口縁部は内側の曲がりが、端部外側に線を付す。	口縁部内・外面黒ナテ。体部内・外面ナテ。	石英・砂粒 にぶい赤褐色 普通	P 12 5% 第2トレンチ覆土上層 P L 10 常備系



第23图 第3·4号土壘出土遺物実測図(1)



第24図 第3・4号土壘出土遺物実測図(2)

図版番号	器種	寸法値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第24図 14	甕 陶器	A (20.2) B (5.7)	口縁部片。口縁部は幅の広い粘土帯 が高く、肩部外側に段を持つ。	口縁部内・外面丁寧な焼ナデ。	灰石・砂粒 赤褐色 普通	P 13 5% 第5トレンチ覆土中 P L 10 常設系
第23図 15	甕 陶器	B (4.6) C (13.8)	底部から体部下手にかけたの破片。 体部は、外側しながら立ち上がる。	体部内面ナデ、外面へく振り。	石灰・砂粒 に灰・褐色 普通	P 14 5% 第5トレンチ覆土中 P L 10 常設系

図版番号	器種	計測				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第24図16	瓦輪等(地輪)	18.1	(17.8)	7.9	(3536)	花崗岩	第3トレンチ覆土下層	Q 1 P L 10

2 堀

今回の調査で、土壘の南側に堀1条(前回調査で検出された第8号堀)と土壘の北側に第23・24号堀が検出された。以下、今回の調査で検出された堀について記載する。

第23号堀(第20・21図)

位置 調査区東部、H 6 J4～I 6 a5区。

重複関係 本跡は、第24号堀に掘り込まれている。

規模と形状 堀の南東部が調査区域外に延びるため、正確な規模は不明である。南東から北西(N-30°-W)に延びる。堀の上幅は(3.8)m、下幅0.5～0.6m、堀底部から確認面までの比高は2.68mである。

壁面 南壁は65～80度、北壁は50～60度の角度で立ち上がる。壁は締まりのあるロームで、掘下半は粘土である。

底面 平坦である。

覆土 第1号トレンチの土層観察では、ブロック状の堆積状況をしており、本跡は人為的に埋め戻されたと考えられる。

遺物 出土していない。

所見 本跡は、第8号堀に囲まれた郭の中にあり、防禦を強化するために構築されたと考えられる。

第24号堀（第20～22図・26図）

位置 調査区東部、H 6 a4～H 6 j3区。

重複関係 本跡が、第23号堀を掘り込んでいる。

規模と形状 堀の両端が調査区域外に延びるため、正確な規模は不明である。南東から北西（N-35°-W）に（5.2）m延びる。堀底部から確認面までの比高は2.84mである。堀の上幅及び下幅は北壁が調査区外のため不明である。

壁面 南壁は75～80度の角度で立ち上がる。北壁は調査区外のため確認できなかった。壁は締まりのあるロームで、壁下半は粘土である。

底面 平坦である。

覆土 第1～3号トレンチの土層観察では、ブロック状の堆積をしており、本跡は人為的に埋め戻されたと考えられる。

遺物 出土していない。

所見 本跡は、第23号堀の埋め戻しに伴い、北側に新たに構築されている。防禦強化のため整備・構築されたと考えられる。

3 土坑

当遺跡の上呈中央部の頂上付近から、土坑1基が検出された。以下、土坑について記載した。

第1292号土坑（第26図）

位置 調査区中央部、H 6 j3区。

規模と平面形 長径1.38m、短径0.65mの不整楕円形で、深さ33cmである。

壁面 外傾して立ち上がる。

底面 平坦である。

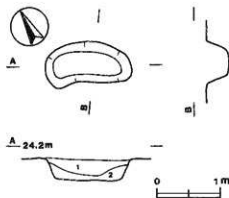
覆土 2層からなる。堆積状況から自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 褐色 ローム小ブロック少量、ローム粒子少量
- 2 褐色 ローム粒子中量、ローム中ブロック少量

遺物 出土していない。

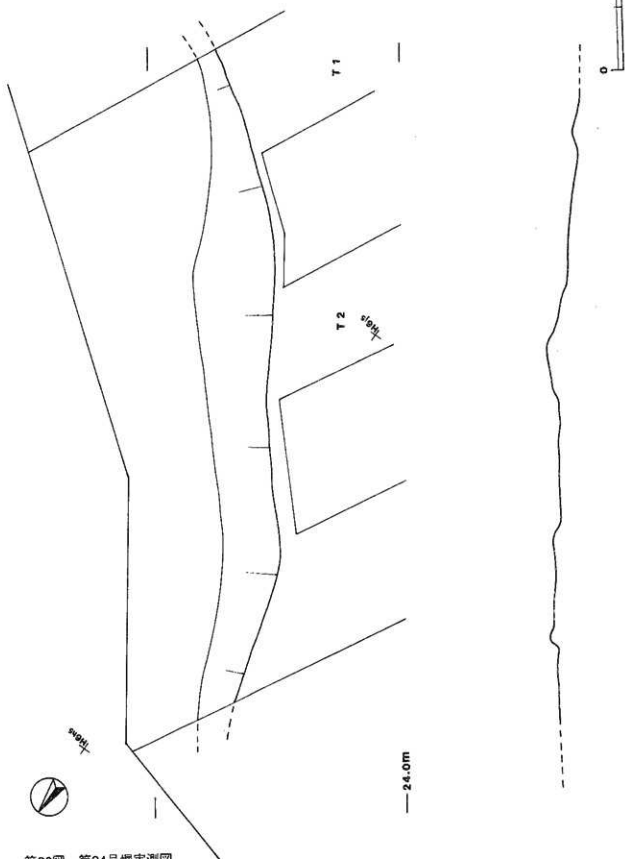
所見 第3号土呈上に構築されていることから、中世以降の土坑と考えられるが、出土遺物がなく詳細は不明である。



第25図 第1292号土坑実測図

4 ビット群

当遺跡からは、ビット群1か所を検出した。建物跡等の可能性が考えられるが対応関係が把握できないので、ここではビット群として扱う。



第26图 第24号地实测图

第1号ピット群 (第20図)

位置 調査区西部、H5h0~H6j1区。

規模 南北11.5m、東西13.0mの範囲に7か所 (P1~P7) のピットを検出した。ピットの平面は径14~35cmの円形あるいは楕円形で、深さは21~87cmである。

覆土 土層断面の採掘は行わなかったが、覆土は褐色でロームブロックやローム粒子が含まれており、人為堆積と考えられる。

遺物 出土していない。

所見 ピットは第3・4号土塁上から検出されており、土塁上に柱や欄干が構築されていた可能性が考えられるが、遺物は出土しておらず、時期は不明である。

5 遺構外出土遺物

当遺跡からは、表土除去、遺構確認の過程で遺構に伴わない弥生時代、中世から近世までの遺物が出土している。以下、これらの出土遺物について実測図及び一覧表で掲載する。

弥生土器

トレンチの覆土から弥生土器片が数片出土した。第27図2の弥生土器片は付加条一種 (付加2条) の縄文が施文されており、後期の土器に比定される。

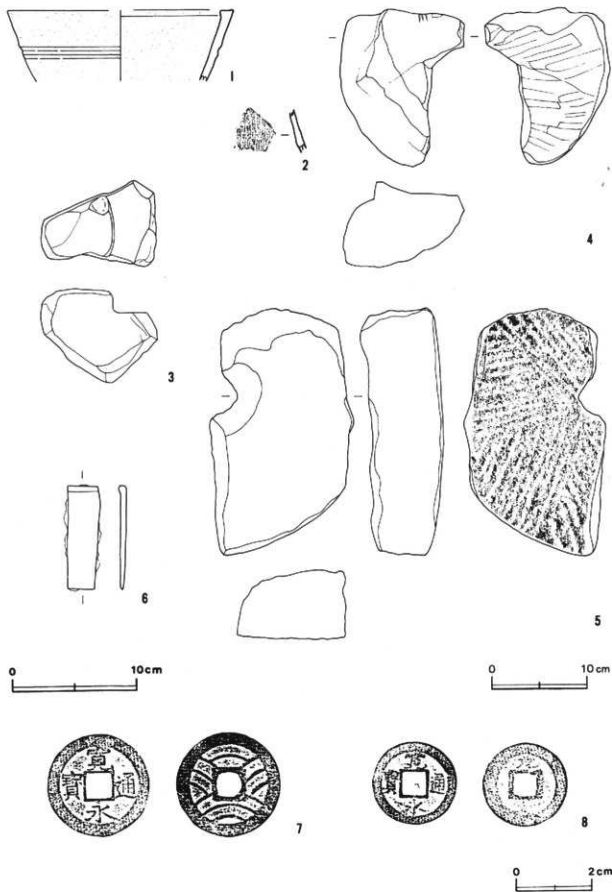
遺構外出土遺物観察表

図版番号	種別	計測値 (cm)	器形の特徴	下法の特徴	胎土・色澤・産地	備考
第27図1	横鉢	A (18.0) H (5.7)	口縁部片、体部から口縁部にかけて外傾する。口縁部外側下側に比線を持つ。	ロクロ製形。体部内・外面成釉。	石英・雲母に多い黄褐色 青褐色	P16 第5トレンチ表土 P.L10 10%

図版番号	種別	計測値				行質	出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第27図3	石臼	(12.3)	(9.1)	10.0	(833.0)	安山岩	第3トレンチ表土	Q2 P.L10
4	石臼	(16.5)	(12.8)	8.8	(1644.0)	砂岩	表土	Q3 P.L10
5	石臼	(19.5)	(13.9)	7.6	(4030.0)	安山岩	第3トレンチ表土	Q4 P.L10

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
第27図6	横鉢	8.1	2.5	0.5	36	第2トレンチ表土	M1

図版番号	種別	初 期 年	出 土 地 点	備 考
第27図7	瓦水滲室	1736	第3トレンチ表土	M2
8	瓦水滲室	1736	第5トレンチ表土	M3



第27图 遼满外出土遺物実測図

第3節 まとめ

今回の調査で検出された遺構は、土塁2基、堀2条、土坑1基、ピット群1か所である。これらの遺構の中で、土塁及び堀は厩代城に伴う中世の遺構であると考えられる。以下、厩代城との関連が考えられる本跡についての概要を述べ、まとめとする。

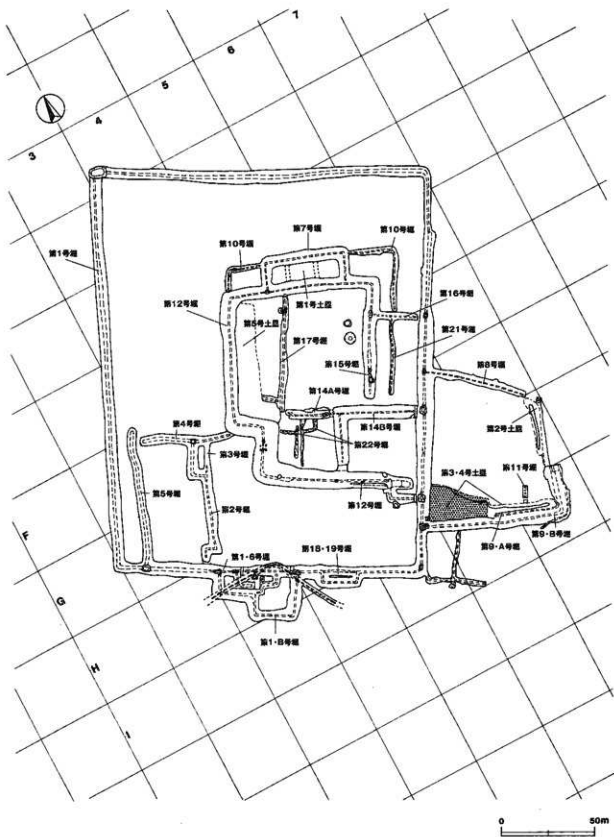
12～13世紀の東条荘（竜ヶ崎地方）は、北条氏一門の「得宗領」として、その支配下に入り、厩代台地上に館を築造しその支配を確立していった。元弘3年（1333）鎌倉幕府の倒壊とともに、東条荘の支配は建武政権（南朝方）に変わった。その後、南北朝の動乱の中で東条荘は南朝方の中心として、北朝との戦いが行われたが、暦応4年（興国2年1341）北朝方に敗れ、足利氏の勢力下に入った。館も廃棄されたと考えられる。その後、足利氏の奉公衆であった厩代氏が14世紀中頃から15世紀初頭に館跡に厩代城を築城したと考えられ、その後15世紀半ばの結城合戦や16世紀初頭の小田・上城原氏の対立・抗争にあわせて拡張・整備・改築が行われたと思われる。天正18年（1590）豊臣秀吉の小田原攻撃で、北条氏の敗北に伴い後北条氏の配下であった江戸崎・牛久・龍ヶ崎は豊臣秀吉に掌握され、没収所領は豊臣人名の領地として分割された。その際、厩代城は廃城となったと考えられる。

城館跡は、北西から南東に延びる幅300mほどの台地上に位置し、北側は谷津、南側は低地、東側には細い谷が入り込んでいる。Ⅰの郭は、土塁と堀に囲まれた1辺50mから80mの方形の郭であり、Ⅱの郭は、台地東側の傾斜部に位置し、土塁に囲まれた1辺50mから70mの方形の郭であることが表面観察によりとらえられた。昭和54～58年度に厩代A遺跡、昭和58～61年度に厩代B遺跡の調査が行われ、これらの調査により、厩代城は3期にわたり造営・改修が行われ、方形の館跡から「回字型」の城郭に発展したことが確認できた。

今回は、厩代城南東部（Ⅱの郭）に位置する未調査の土塁の調査を行った。調査により、土塁2基、堀（Ⅱの郭内）2条が検出された。これらは厩代城第Ⅱ期の「回字型」の城郭が造られた時期から第Ⅲ期の城郭がさらに発展した時期の遺構であると考えられる。土塁は、先ず第4号土塁（第Ⅱ期）が構築され、その後の拡張・整備に伴い第4号土塁を基部として、第3号土塁（第Ⅲ期）が構築されている。土塁の上層断面から第4号土塁は、構築の際見かけ上の土塁を削り残し、盛土をして構築されており、「削り出し」と「敷き」が複合して使われている。第3号土塁は、第4号土塁を基部としその上や周りに盛土をして構築されており、「敷き」が使われている。土塁の西部は八畳ほどの平場があり、この付近から土坑やピットが検出されており、櫓台として使われた可能性も考えられる。さらに、土塁北側（Ⅱの郭内部）に堀2条（第23・24号堀）が検出された。いずれの堀も調査区域外に延びるため正確な規模は不明であるが、土塁北側と並行して構築されており、防御を強化するために使われたと考えられる。重複関係は、第23号堀が埋め戻された後に、第24号が新たに構築されており、城郭や土塁の造営・改修に伴い、堀も改修されたと考えられる。

参考文献

- ・小野 義宣「城館跡等に見られる土塁の覚書」『研究紀要』第14号 埼玉歴史資料館 1992年3月
- ・茨城県教育財団「竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書17」『茨城県教育財団調査報告』第45集 1988年3月
- ・龍ヶ崎市史編さん委員会「龍ヶ崎市史 中世編」1988年3月
- ・龍ヶ崎市史編さん委員会「龍ヶ崎市史 中世資料編 別冊」1994年3月
- ・龍ヶ崎市教育委員会「龍ヶ崎市史 別冊Ⅱ-龍ヶ崎の中世城郭-」1987年3月



第28図 屋代城館跡全体図

縦横の線は大調査区を示す。(凡例参照)

写 真 図 版

長 峰 古 墳 群
屋 代 B 遺 跡 IV



長峰古墳群遠景



調査区全景

PL 2

長峰古墳群



第3号塚調査前風景



第3号塚土層断面 (B-B')



第3号塚土層断面 (A-A')



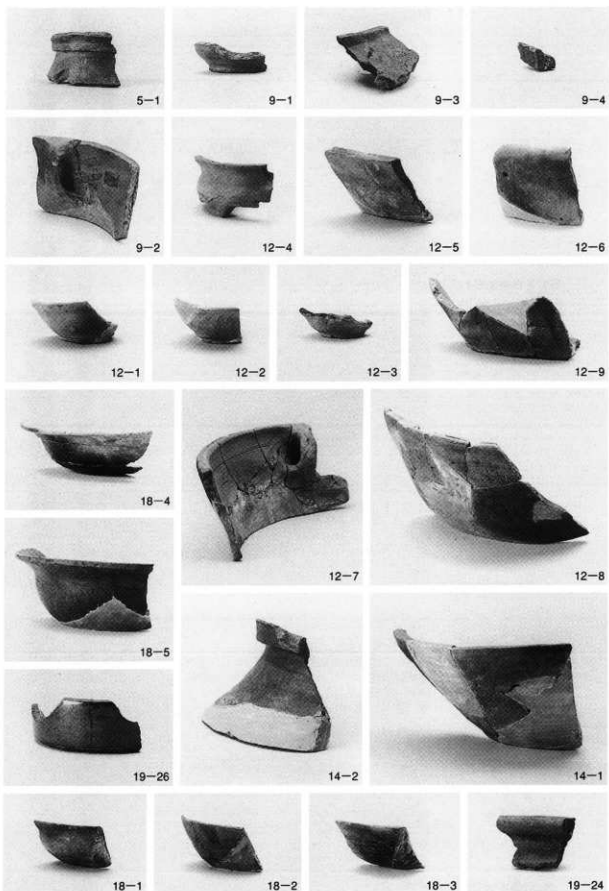
第37号墳遺物出土状況



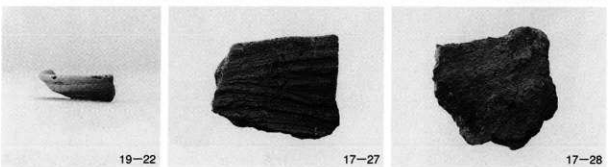
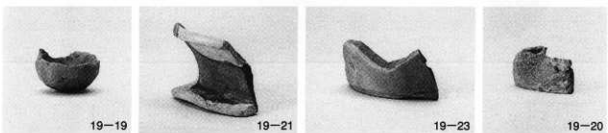
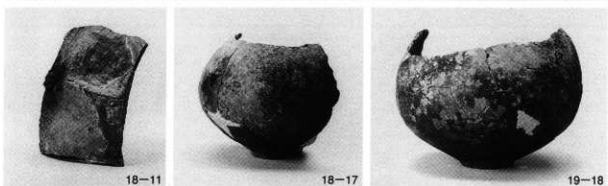
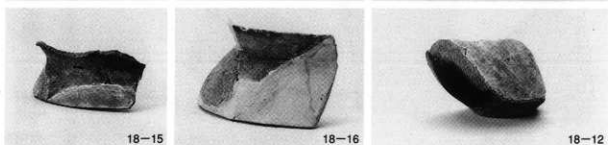
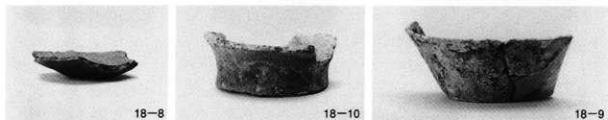
第37号堀完掘状況

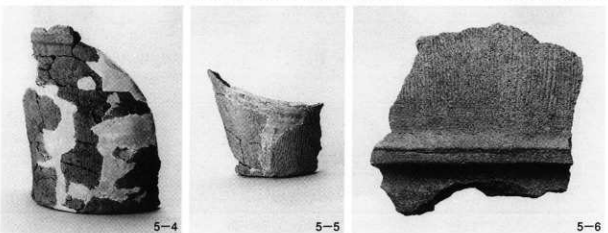
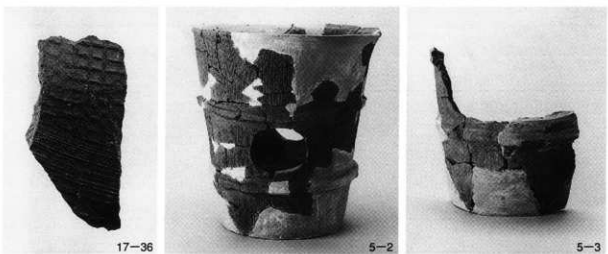
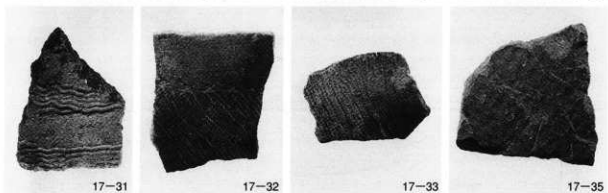
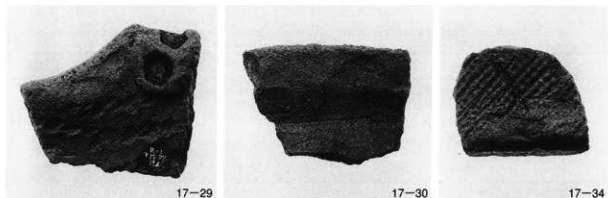


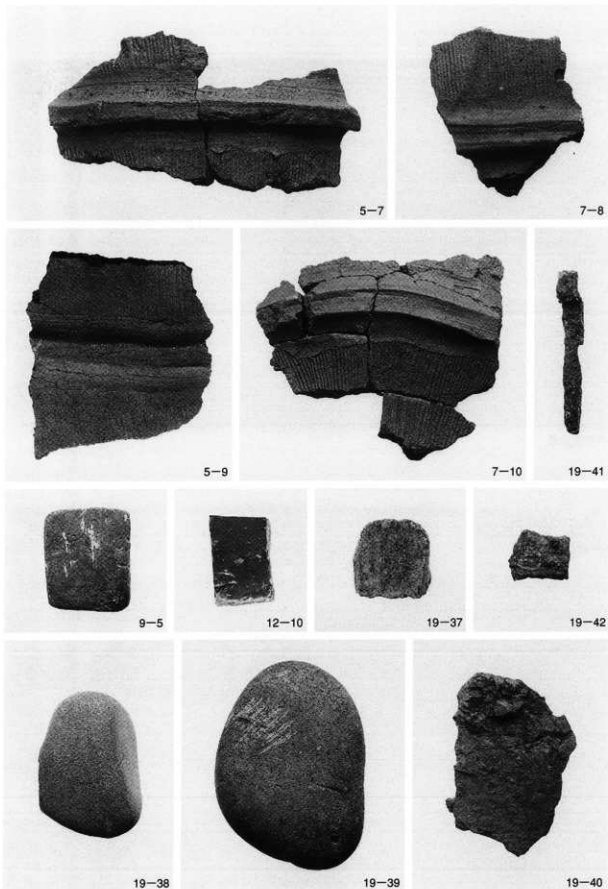
第187号土坑完掘状況



第37号墳・第3号塚・第37号堀・遺構外出土遺物







第37号墳・第3号塚・第37号堀・遺構外出土遺物



調査前全景



調査終了時全景



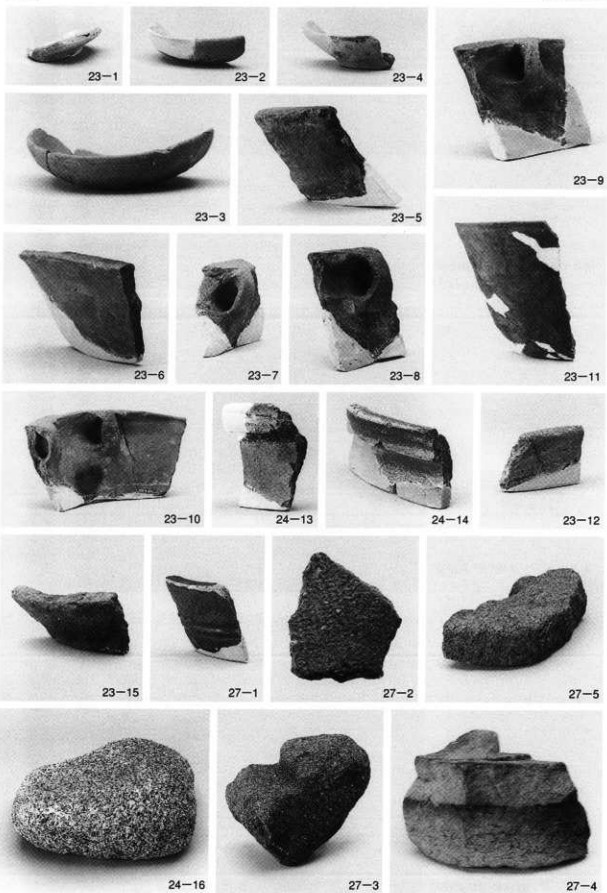
第4号トレンチ北部土層断面
(D-D')



第3号トレンチ南部土層断面
(C-C')



第24号堀完掘状況



茨城県教育財団文化財調査報告第158集

竜ヶ崎ニュータウン内
埋蔵文化財調査報告書21

長峰古墳群
歴代B遺跡Ⅳ

平成12(2000)年3月16日 印刷

平成12(2000)年3月21日 発行

発行 財団法人 茨城県教育財団
〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2
茨城県水戸生涯学習センター分館内
TEL. 029-255-6587

印刷 富士オフセット印刷株式会社
〒310-0012 水戸市根本3丁目1534-2
TEL. 029-231-4241